

『長い正月』

【登場人物】

木村ふく (きむらふく) | 1902年生。博の妻。  
 木村博 (きむらひろし) | 1900年生。ふくの夫。  
 木村トミ (きむらとみ) | 1876年生。博の母。  
 木村勝一 (きむらしょういち) | 1930年生。博とふくの長男。  
 木村寿美 (きむらすみ) | 1933年生。博とふくの長女。  
 木村園子 (きむらそのこ) | 1935年生。勝一の妻。  
 木村智恵 (きむらちえ) | 1960年生。勝一と園子の長女。  
 木村健太 (きむらけんた) | 1968年生。勝一と園子の長男。  
 里見ひかる (さとみひかる) | 2000年生。里見と智恵の長女。  
 田崎克也 (たざきかつや) | 1898年生。博の幼馴染。  
 田崎春彦 (たざきはるひこ) | 1945年生。克也の養子。  
 田崎清春 (たざききよはる) | 1991年生。春彦の孫。

【兼役】 左記の役は、兼役が可能な役。

ふく / ひかる  
 博 / 健太  
 トミ / 智恵  
 克也 / 清春

【名前だけの登場人物】

宮司さん (ぐうじさん) | 1876年生。克也の父。  
 田崎艶子 (たざきつやこ) | 1896年生。克也の姉。  
 田崎房江 (たざきふさえ) | 1899年生。克也の妻。  
 田崎正司 (たざきしょうじ) | 1936年生。克也の甥。  
 里見英嗣 (さとみひでつぐ) | 1970年生。智恵の夫。

【脚本上の記号】

☆／★ | 同じ記号を付した複数の台詞は、同時に発する台詞。

## 【あらすじ】

『長い正月』は、神社の隣でちっぽけな酒屋を営む木村家が、時代の流れや家族の生死に翻弄されながらも、家をどうにか守るため、家業を変えながら新年を迎えようとする、100年に亘った物語である。上演時間は100分。

### (一幕)

1923年の大晦日、東京都多摩市。家長の博、妻のふく、博の実母・トミの3人で酒屋を営む木村家は、博とふくが結婚して間もなく関東大震災に見舞われ、家と店が半壊する散々な一年を送ったものの、他愛ない話に花を咲かせながら、新年を迎えようとする。やがて、妻に先立たれた隣の神社の禰宜・田崎克也も食卓に加わるが、元号が昭和に変わる頃、トミが逝去する。

景気が高まり、戦争の足音も聴こえ始めた頃、木村家は家業を純喫茶に変え、長男・勝一、長女・寿美と、2人の子宝に恵まれる。一方の克也は酒の飲み過ぎが祟り病に倒れるが、一命を取り留める。

克也の体調が回復する頃には第二次世界大戦が勃発。戦争が木村家にも影を落とす。勝一、寿美が健やかに育つ一方で、甲種検査に落ち続けてきた博にも遂に招集令状が届き、博は戦地で帰らぬ人となる。

経済復興期。レコードをかけて踊り、博が死んだ悲しみを紛らわそうとする木村家に、勝一の妻・園子加わる。しかし、子宝に恵まれたと思われた矢先、2人の間にできた子どもは生後間もなく天国に召される。

オリンピック景気が高まる最中、宮司になった克也は春彦という少年を養子に迎え、勝一と園子にも待望の第一子・智恵が生まれる。

だが、木村喫茶の経営状況が次第に悪化し、小説家の道に光を見出そうとする勝一が交通事故に遭うなど、木村家の受難は続く。一方の田崎家は、プロ野球選手を目指す春彦の進路に克也が猛反対。寿美が春彦の背中を押そうとするが、結局、夢を断念した春彦は神職の道を進み、程なくして克也は往生する。

勝一と園子の第二子・健太が誕生する頃には、木村家の大晦日に活気が戻り始める。「歌えるジュークボックス」に光明を見出した園子の提案で、木村家は家業を純喫茶からカラオケ喫茶に変える決断をするが、同じ頃、長年木村家を支えてきたふくが、この世を去る。

(二幕)

ふくを見送ったのち、木村家を出て多摩ニュータウンで独居を始める寿美。一度は寿美をデートに誘った春彦は、別の女性と結婚、のちに離婚。血縁のいざこざで宮司職にも就けず、最終的には平の神職として多摩に留まることを選ぶ。

ファミコンが普及し始める頃。元旦の食卓を囲むのは、勝一、園子、寿美、春彦と、OLの智恵、高校生の健太。家族総勢カラオケ大会に興じるなど、理想の家庭を築いたかのように見えた木村家だったが、受験の失敗を巡って勝一と衝突した健太が引きこもりになり空気が一転。智恵の長年に渡る不倫も明らかになり、園子がかつてない激しさで智恵を叱責するなど、木村家に氷河期が訪れる。

しかし、疲弊しきつた木村家の空気を春彦が変える。自身が戦災孤児であることと、克也との出会いの真相を告白した春彦はその後、戦後50年のテレビ特番にも出演し、家族の在り方について思いを馳せる機会を木村家に与える。

世紀末が近づく頃、園子が急性疾患に倒れるが、勝一が早く発見し、九死に一生を得る。園子の回復に伴い木村家は再出発を果たし、智恵は園子の担当医師・里見と交際を始め、健太もアルバイトを始める。ところが、健太への謝罪を誓い、智恵の拳式を待望していた勝一が志半ばで寿命を迎え、木村家の一員がまたこの世を去る。

日本が韓流ブームに沸く頃、寿美は生まれ育った多摩から離れる決意を固め、遂に宮司となった春彦を讃えつつ、新天地・韓国へと旅立つ。定職に就いた健太が恋人との同棲のために家を離れ、里見と結婚した智恵も、正月に帰らないことが徐々に増えるなど、木村家は形を変えざるを得なくなる。

東日本大震災が起こってからは、里見の生家がある岩手に智恵が引越し、木村家・元旦の食卓を囲むのは、園子と春彦のただ2人だけになる。孫息子の清春におぶられるほど足腰が弱った春彦も、やがて食卓を訪れなくなり、タピオカブームが来る頃には、園子は一人の正月を過ごすことが増えていく。

新型コロナウイルスが蔓延する頃には、寿美が臨終。孤独を募らせる園子のもとに、岩手から智恵の子・ひかるが上京するが、喜びも束の間、園子も他界する。2024年の元旦、ひかるの住む家に健太が訪れる。ひかるがカラオケを歌い出すと、木村家100年の記憶が、めぐり、まわりはじめる。

## 【舞台設定】

木造作りの木村家。居間。およそ10畳。炬燵とちゃぶ台が並んでいて、回りには座布団が敷かれている。

観客席から見て右側、つまりは上手が上座、家長が座する席。

左側、つまりは下手が下座の席である。

居間は縁側に繋がっていて、客はしばしば外から縁側を通って出入りする。

上手の登退場口には不自然にも紅白幕、下手の登退場口は同じく不自然に浅黄幕がかかっており、それぞれの幕は、慶事と弔事、生と死を示している。

またそれ以外に、廊下に繋がる登退場口と、玄関に繋がる登退場口がある。

それらを作中は便宜上、「生」の入口、「死」の出口、廊下、玄関、とする。

この劇では、大正12年(1923年)の大晦日から、令和6年(2024年)の元旦まで、およそ100年の歳月が流れる。

その時代に沿った大道具、小道具、衣装、メイクを、100年分表現するとなると、セット替え、衣装替えに莫大な時間、お金がかかってしまう上に、それが演劇として効果的な表現かどうか非常に難しい判断だと思うので、俳優たちは、きわめて普通の衣装を身に着け、「演技」によって、歳を重ねる様子を表現して頂きたく、お願いします。

同様に、俳優たちは、「観客の目には見えない」年越し蕎麦と、お節料理、その他の飲食物を食べ、飲み続ける。理由はもちろん、お金と時間が足りないからである。

演劇は制限と想像力の芸術なはずだ。

そんな使い古された言葉を強く信じて頂き、目には見えない飯を食い、酒を飲みながら、100分で100年間を表現して頂きたい。お願いします。

ちなみに木村家は、100年間で商いを何べんも変えるとは言え、少なくとも家業の観点で言えば、いわゆる一般家庭である。

少しだけ変わっている点があるとすれば、敷地の隣に大きめの神社があることで、隣の神社の家族の面々は、年末年始の鬼のような忙しさから逃げるように、しばしば木村家を訪れることとなる。

## 【客入れ】

大晦日にふさわしい音楽が、スピーカーから流れている。  
例えば、

『東京ブギウギ』	/	笠置シヅ子
『いつでも夢を』	/	吉永小百合&橋幸夫
『あの鐘を鳴らすのはあなた』	/	和田アキ子
『まつり』	/	北島三郎
『川の流れのように』	/	美空ひばり
『GOLD FINGER '99』	/	郷ひろみ
『LOVEマシーン』	/	モーニング娘。
『女々しくて』	/	ゴールデンボンバー

…など。

紅白歌合戦のように、男女が交互のセットリストでもよいのかもしれない。上演  
がいつ何時でも、観客の「年末感」を呼び起こせるとよいと思います。

## 【開演前】

松平健の代表曲『マツケンサンバⅡ』が元氣よく流れる。  
博を演じる俳優が「生」の入口から登場し、廊下へと去る。  
トミ、ふくを演じる俳優が玄関から登場し、廊下へと去る。

その間、つまりはマツケンサンバの気が長くなるような長い長いイントロの間  
に、勝一を演じる俳優が、観客に向かって前説を行う。

大正12年(1923年)から物語が始まるため、是非観客の皆様には携帯電話は  
電源からお切り頂きたい。

歌に差し掛かるところで溶暗。  
開演。

【一幕】

ふく(声) ♪もうひとつねるとお正月

ふくの歌声に先行して、溶明。

時は大正12年(1923年)の大晦日である。

ふく(声) ♪(替え歌を楽しみながら)お正月には餅食べ…蕎麦食べて

木村ふく(以下、ふく)、廊下から登場。

ふく ♪こまを…酒を…(本当の歌詞がまったく思い出せず適当に)肩を叩いて眠りましょう

♪はやく来い来いお正月

ふく、蕎麦を炬燵に置いて、一息つく。縁側に腰掛けてうたた寝をしている木村博(以下、博)を見る。博のいる位置から少し離れて、博の眼鏡が置いてある。

ふく あなた。…あなた。

博 ん? ああ、

ふく 起きてください。冷えますよ。

博 あけまして、おめでとう。

ふく (愉快に思って)あけてないのよ。まだー時過ぎ。

博 ん?

ふく お蕎麦、食べましょ。

博 蕎麦って…年越し蕎麦かい?

ふく ええ。

博 お前が打ったのかい?

ふく はい。足で。

博 足で?

ふく 足によりをかけて。

博 なんだいそれは。

ふく 買うと高くつくから、踏んでこねて踏んでこねて、ってしたのよ。

博 (笑って)じゃあ、頂かないと。眼鏡は…と。

ふく (置いてある眼鏡を渡して)はい。

博 ★ありがとう。

ふく ★(遠くに)お義母さん……お義母さん！

木村トミ(以下、トミ)、廊下から登場。

トミ (ふくのすぐ近くから現れて)そんなに大声を出さなくても聞こえているわよ。

ふく 大声を出さなくても聞こえる位置にいてくださいな。

トミ ふう……お節はまだなの？

ふく 今たきちゃんが用意しています。

トミ 蕎麦といっしょに食べないのかい？

ふく お蕎麦と？変ですよ。そんなの。

トミ 変ってあんた、うちじゃ昔から、

博 母さん。細かいことを言うなよ。せっかくふくが足によりをかけたってんだから。

トミ 足に？

博 家族になるってのは、変を受け入れることなんだから。

トミ 変？

博 変だろ？

トミ 変とは思ってんのかい。

ふく もう、失礼ね。

博 さあ早く座って。

ふく お蕎麦を食べた頃にお節も上がりますから。

博 たきちゃん、酒。

博とトミは座り、ふくは廊下からやってきた女中から酒を受け取り、それを配膳する(なお女中はこの先、時の流れとともに入れ替わっていくが、女中も観客の目には見えないものとして演じるのが望ましい)。

博 いやあ今年は……なんだ、結婚間もなく巨大な地震が関東を襲い、家は燃え、店は傾き、散々な年だったが、その、家族はまあ息災で☆あつてだな、

ふく ☆いただきます(と、蕎麦を啜る)。

トミ (ふくを見て笑う)

博 待て待て。最後まで聞けよ。

ふく 嫌ですよそんな、  
トミ 湿っほい。  
ふく がんもどぎ。  
博 なんだよがんもどぎって。  
ふく 復興。復興なのよともかく。  
博 まあ、それは、まあ。  
ふく 居間と縁側が残ったんだけど、よしとしましょうよ。  
博 多摩村の大工は腕が立つからな。  
ふく さすが新撰組の村だわ。  
トミ ふくさんの親御さんは、生まれはどちらだったかね。  
博 ★うん。旨い。  
ふく ★西です。大阪。  
トミ ざおりで。  
ふく はい。  
トミ 素朴な味だねえ。  
ふく あら。褒められちゃった。  
博 褒められてはいないんじゃないか。  
トミ たぎちゃん、塩。  
博 ほら。  
ふく たぎちゃん、私も。  
博 どうなっているんだ。

ふく、女中から受け取った塩をトミに渡しながら、  
ふく お義母様のお生まれは、青山でしたよね？  
トミ そう、今の天皇陛下とご一緒だね。  
ふく あら(トミのお猪口に酒を注ぐ)。  
トミ 鼻につく人間も多い土地だけれどね、陛下のおかげで自分の生まれを好きになったと言っても過言ではないわ。  
ふく 親しみやすい御方だって聞きますものね。  
博 なあ、ふく。大晦日なんだ。せっかくだしお前も飲んだらどつだ。  
ふく あ、いいですいいです。  
博 ☆ええ？  
トミ ☆まあ。  
ふく ご厚意に甘えたいところですけどね。私、お酒なんか頂いたら踊り出してしまうわ。

博 見てみたい気もするけど★な。

★近所にある神社の禰宜(ねぎ)・田崎克也(以下、克也)、縁側から登場。博の幼馴染であり、木村家と田崎家は昔から馴染みの関係である。

克也 ★やあみんな、俺が来たぞ。

トミ まあまあかつちゃん、

博 またこんなところで油売って。

克也 固いこと言うな。とめちゃん、酒。

トミ よくきたねえ(と言って克也の手を取る)。

博 神職がいいの？ご奉仕前に。

トミ これから夜通しご奉仕なんだから、ちょっとくらいバチは当たらないよ。

克也 ☆そつだよねえ。

博 ☆よその子に甘いんだから。

トミ ほら、お客様が見えたんですから、早くお節を持ってきなさい。

ふく (モゴモゴしながら)とめちゃん、何かお節できてる？

ふく、一度廊下に退場。

博 一番祈祷はいいの？

克也 (蕎麦を食べ始めて)親父がやるって。

博 ひさしぶりだね。

克也 まあほら、天皇様も崩御されたし、ここは俺がって。

博 ★ああ。

克也 ★目立ちたがりなのさ。生来うちの親父は。そしてその血は脈々と姉が受け継いでいる。

博 艶子さん、宮司さんそっくりなものな。

克也 さあ。献杯。

博 献杯。

トミ、無言で酒を呷ると、自分のお猪口に酒を注ぎ、立て続けに飲み始める。

博 まあ、それがサボタージュの理由にはならないけどな。

ふく ☆廊下から戻ってきてさ、昆布巻きですよ。

克也 ☆デカイ口叩くじゃないか。ちょっと前までめそめそしていたくせ

に。

ふく お義母さん？

博 すぐそれを言うんだから。

克也 震災の時分なんて、家が店がつてめそめそめそ、

博 ★それは…、

克也 ★ありゃ何年前だ。

ふく お義母さん飲み過ぎじゃ…、

博 大正12年だから、3年前だよ。

克也 そんなに前かい。光陰矢の如し。時間が過ぎるのは…、

トミ かつちゃん、

克也 ん？

トミ よくきたねえ(と言って克也の手を取る)。

克也 うん。ん、去年もそんなこと言ってたな。

博 このところいつつもで☆さ。

トミ ☆たきちゃん、お塩。

克也 たきちゃん？

博 前の(女中さん)。

克也 ★ああ。

トミ ★(立ち上がり)たきちゃん！

ふく たきちゃんはいませんの。さ、昆布巻き召し上がって。

次の会話の間に、トミはゆっくりと、「死」の出口の方へと歩みを進める。

トミ 冬は濃い口くらいがちょうどいいのよ。

博 わかったから。

ふく お義母さん、お塩。

トミ どれ、私がお勝手に行ってきますからね。

博 母さん、どこへ行くんだよ。

ふく 間もなく黒豆が上がりますよ。

克也 トミさんの昆布巻きは絶品だったよな。

博 黙って食いなよ。

トミ、「死」の出口へと退場。ふと沈黙。

克也、縁側へと歩いてゆき、

克也 こんなに積もった大晦日はいつぶりだろうな。

克也、縁側に腰を掛け、煙草に火をつける。

克也　うちの親父も張り切っちゃってさ、年を跨ぐ前に寝溜めしておけよって言っても、まだ耄碌する年じゃないなんて頑なでね、年甲斐もなく雪掻きに精を出していたよ。

博　お袋と同一年だものね。

克也　同級生の葬式をあげることほど切ないものはないってよ。

ふく　宮司さんの祝詞、震えてたわ(立ち上がって、廊下の方へと行く)。

克也　ああ。

博　かっちゃん。

克也　ん？

博　俺の葬式はかっちゃんに頼んだよ。

克也　俺より先に死ぬ気か？

博　そうじゃなくて、

克也　俺が先に決まってる。

ふく　(女中から黒豆を受け取っていて)嫌ですよそんな話。ほら、黒豆も上がったわ。

克也　まーた黒豆と蕎麦か。相変わらず変な取り合わせだな。

ふく　その内慣れてきますわ。お義母さんも最初は怪訝そうな顔をしていましたけど、去年なんか黒豆をお蕎麦に載せて、そりゃ半ばやけだろう。

克也

一回顔を合わせて笑うも、それも途絶え、みな口を噤む。

ふく　…去年はこちらにいらしたのに。

克也　さ、献杯しよう。

博　そら、ふく(と言って、ふくのお猪口に酒を注ぐ)。

ふく　ええ。

克也、自座につき、

克也　献杯。

ふく　☆献杯。

博　☆献杯。

克也　なんだか毎年喪に服してる気がするな。

ふく 来年はきつと、いいことがありますよ。

暫し無言で蕎麦を啜る3人。

克也 …やっぱりあれだな、

ふく なに？

克也 薄味だよ。

ふく ★ええ？

博 ★(笑って)うん。

ふく これでもうんと濃くしたんですよ。

克也 元はどれだけ薄かったんだ。

博 塩、振っていいかい。

ふく もう。

3人、順々に塩を振って、また蕎麦を啜る。

ふく、黒豆を箸で摘もうとするがスルリと箸から落ちてしまう。

博 なんだ、幸先が悪いな。

博、黒豆を箸で摘もうとするが、やはり覚束ない。

以降もなかなか、黒豆を摘めない2人。次第に愉快になってくる。

博、結局指で黒豆を摘んで食べる。

ふく もうやだあ。

克也 いつまで新婚気分にいるんだ、もう5年だろ。

博 6年だよ。

ふく あっという間ね。

克也 それはそうと、随分と景気が上向いてきたな。

ふく 洋風なお店も随分と増えたものね。

博 酒屋も最近じゃあ、洋酒を扱う店も増えていてさ、

克也 いいじゃないか。洋酒を神社に奉納してくれよ。

博 かつちゃんが飲みたいだけだろ。だいたい、洋酒の味がよくわからないんだ。

克也 じゃあ今度カフェーにでも行くか。

ふく あら貴方、いつてらしてよ。

博 女房が勧めるようなところじゃないぞ、カフェーは。

ふく え、そうなの？

克也 行こう。洋酒だけじゃない、珈琲だって紅茶だってあるんだから。軽い気持ちで、そら。行こう。

博 必死だなあ。

克也 女にちよっかいを出しても内緒にしておいてやるから。

ふく ☆まあ。

博 ☆馬鹿だな。そんなこと言っていないでかつちゃん、早く所帯を持ちなよ。

ふく そつよ。房江さんだつてきつと安心なさいます。

克也 いいよ俺はまだ。暫くは好きにやるさ。

ふく 駄目よ。所帯を持って家族を守る。それが日本の漢という★ものですよ。

★「生」の入口から、女中がおくるみを持って登場。歓声を上げたふくが一目散に駆け寄り、博も続く。克也もそれを見て、立ち上がる。

ふく あらあらあらあら！起きたの？起こしちゃった？あ、黒豆食べる？

博 馬鹿。喉に詰まったらどうするんだ。

ふく (赤子を女中から受け取って)冗談でしゅよね。ほんと、目に入れても痛くないわ。

克也 本当に言う奴初めて見たよ。

博 よしよし。

ふく ほらほら勝ちちゃん、名付け親の克也おじさんですよ(赤子を克也に近付ける)？

克也 もうこんなに大きくなったのかい。この分じゃ嫁を取るのも時間の問題だな(と言いながら再び縁側に煙草を吸いに行く)。

ふく 嫌よ。お嫁さんなんて一生来なくて結構。

克也 話が違うなあ。

博 そら寝たぞ。俺だところはいかないからな。大したもんだよ。

ふく (赤子を女中に渡して)とめちゃん、あとは頼むわね。数の子は私が運びますから。

博 勝一はうちの大事な跡取りなんだからな。落つことさないでくれよ。

女中、ふく、廊下へ退場。

克也 素晴らしい年の瀬だな。ええ？

博 本当に。

克也 お前もやれよ(と、煙草に誘う)。

博 あ、うん。

克也、博に煙草を差し出して、それに火をつけてやる。咳き込む博。

克也 (鼻で笑って)男とすると、ゆくゆくは戦地で手柄を立てるかもしれないな。

ふく (モゴモゴしながら戻ってきて)嫌だわ、生まれたばかりで戦争の話なんて。

博 何？なんて？

ふく 嫌だわ、生まれたばかりで戦争の話なんて。しっかり寿命を全うして頂かないと。はい、数の子。

克也 心配には及ばないよ。昨今の日本は強すぎて、大して戦わずしても勝つて聴くぜ。向かうところ敵なしさ。

博 宮司さんは、平和を祈念しているって言っていたよ。

ふく 私泣いちゃった。その時のお話。

蕎麦を食べ終えたふく、自分の井と博の井を片付ける。

博 お前は毎年泣いているだろ。

克也 はっ、親父は古いんだよ。勝つから豊かになるし、勝つから平和になるんだ。そのありがたい流れを、お国が整えてくれている。おかげで満洲だって攻略することができたんだ。

博 本心かい？それは。

克也 …俺がお前ぐらい若かったらなあ。

博 若くても、神職は兵に取られづらいつて聞くよ。

克也 …とめちゃん、☆酒。

☆ふたたび「生」の入口から、女中がおくるみを持って登場。

ふく ☆あらあらあらー真夜中だって言つのにもう！元気なんだから！

博 (赤子を受け取って)おー、よしよしよしよし。

ふく 全く、お盆とお正月がいっしょに来たような忙しさだわ！

克也 正月は今まさに来てるけどな。

博 勝一はもう寝たのか？

ふく あの子はもうぐっすり。

克也 とめちゃん。酒。

博 俺が行こう。たまにはお前もゆっくりしろ。(数の子を摘んで)とめちゃんには早くお節をやっつけてもらわないとな。

ふく では、お言葉に甘えまして。

博 寿美ちゃん、お父ちゃんとハイキングしましょうねえ。

博、女中、廊下へと退場。

ふく そのうちきつと、「お母さん、お蕎麦を足でこねましょ？」なんて

言うんだわ。うっとりしちゃう。

克也 …(冷めた蕎麦をすする)。

あたたかいのをお出ししますよ？

克也 いやいいんだ。冷めた蕎麦で。

ふく …ねえ克也さん、そろそろ、

克也 いい人を見つけたら？だろ。

ふく びっっくり。開眼されたの？

克也 神職にそんな力備わっていないよ。毎年言うからさ。

ふく だって、その方が★房江さんも

克也 ★房江さんも安心する？聴き飽きたってば。なんでこう、お前た

ちはこの忙しい年の瀬に限ってそーいうことを言い出すんだ。

ふく 私たちは暇ですもの。

克也 (博の酒を取って飲み、)…つんざりするよ。

ふく 房江さん亡くなって何年？

克也 9年。いや、10年になる。

ふく そろ、早いわね。

克也 早いもんか。遅いくらいさ。(ふくの酒を取って飲み、(時間が過ぎるのが遅過ぎる)。

ふく …。

克也 まあでもいいこともあるよ。

ふく なに？

克也 これ以上悪くなりようがないからさ。

克也、ふくからひったくったお猪口を空にする。

博、廊下から登場。珈琲をお盆に乗せて持ってきた。

博 やあやあ、お待たせしました。

克也 おお。あれ？

ふく あら、栗きんとんと珈琲？

博 (珈琲と栗きんとんを置いて) さ、召し上がれ。

克也 …酒は？

博 飲みすぎだよ、かっちゃん。

ふく 体を壊すわ。

克也 酒屋の倅が喫茶店なんぞ始めて。

博 酒屋の倅じゃなくて、マスターと呼んでくれよ。

克也 お前なんかとつるむんじゃなかった。

博 美味しそうに飲んでいたじゃないか、カフェーで。

ふく それが始まりなんですから。

克也 知るかってんだ。

博 ねえほら、飲んでみなよ。

克也 いい、いい。

博 栗きんとんにも合うっぜ？

克也 (立ち上がりながら) いいから酒だ。

克也、体を震わせながら「死」の出口の方へゆっくり進んでいく。

ふく 克也さん？大丈夫？

博 宮司さんに聞いたんだが、☆最近酒ばかりで碌に食べていないらしい。

克也 ☆寒い、こんなに積もった大晦日はいつぶりだろう。

博 母さんが死んだ年だよ。ねえ、

ふく ねえほら珈琲、召し上がったら？

克也 やっと俺にもお迎えが来たか。

博 馬鹿なこと言っていないで珈琲飲んであたたまりなよ。

克也 いい、いい。

博 俺の葬式挙げてくれて言ったじゃないか。ほら。

克也、満身創痍で珈琲を受け取り、震えながら啜る。震えが少しずつ収まりながら、自座へと戻る。

克也 (少し人が変わったように) やっぱり大晦日はこの家で過ごすに限る

な。  
ご自分の家で過ごして下さいな。  
家にいると気が滅入るんだよ。  
ねえ、そろそろ安心してもらうためにも、★いい人でも…  
★いい人でも見つけようかな、うん。いい加減。ね。

博、新聞を広げている。これまでと違う鋭利な雰囲気。

博 ゆっくりしていくといいよ。つね、酒はまだか。

克也 珈琲は飲まないのか。

博 このところ客入りが良くてさ。見るのも嫌になっちゃうよ。かつ

ちゃん煙草は？

克也 俺はもう、よしておく。

博 (縁側に移動しながら)酒は？

克也 二度とごめんだ。

ふく (女中から受け取った酒を注ぎこつとしてはい、お酒。

博 (それを奪って)いいよ。

ふく ええ…。

博、年季の入った仕草で煙草に火をつけ、片手間に酒を飲む。

克也 (昆布巻を食べて)あれ？

ふく どうしました？

克也 病み上がりだからか？味が濃いぞ。トミさんが作ったみたいだ。

ふく ☆それは、

博 ☆爺さんみたいなこと言うな。今までが薄過ぎたのさ。

克也 …(ふくに近寄って)近頃ああなのかい？

ふく 克也さんが肝臓を患われてすぐ？話し相手になってやってくださいな。  
な。

克也 よし、任せろ。

克也、意気込んだ割に、モタモタと博に話しかける。

克也 …やあ、その、博、最近…、どうだ？

ふく 下手くそね。

博 遂に欧米諸国で始まったな。

克也 戦争か？

博 どの国もござって日本に倣っちゃってさ、どー思う？

克也 さあ。

博 今更過ぎる。

克也 …なあ、あんまり似合わない話をするなよ。

博 似合うも似合わないもないよ。

克也 何が？

博 来る客みんな戦争の話で持ちきりなんだから。

克也 何も戦争の話をするために喫茶店を始めたわけじゃないだろう。

博 じゃあ何の話すればいいって言うんだよ。

ふく この1年の話をすればいいじゃない。

博 だからこの1年、戦争の話しかしてないんだって。

ふく …。

博 (厭世的に笑い出して)

克也 なんだよ。

博 いや。まあ、悠長に喫茶店をやっていた頃の俺が悪い。今はそう思

うけどね。

勝一(声) つねちゃん、いいの大丈夫、僕が運ぶってば。

木村勝一(以下、勝一)、伊達巻と海老の鬼殻焼きが載ったお盆を持って、「生」の入口から登場。

勝一 お母ちゃん出来たよ。伊達巻きと、鬼じゃら？ん、鬼ぎやら？ん、

ふく 海老の鬼殻焼きね。お利口さん。

勝一 ★へへ。

博 ★まだ起きてたのか、もう1時半だぞ。

勝一 ごめんなさい。

克也 ☆謝ることないだろう。

ふく ☆まあいいんじゃない、大晦日くらい。

勝一 へへ。かつちゃんおじさん、(敬礼して)こんばんは。

克也 (敬礼して)こんばんは。

勝一 俺明日行くね、初詣。

克也 来い来い。

ふく 何かお願いごとがあるの？

博 そりゃあ、日本国の大勝利に決まってるだろう。

克也 勝一が祈念しないと勝てないほど日本国は危ういのか？

博

★なに？

ふく

★拍手を打ってさあさあ、せっかく勝一が運んでくれたんですから。ほら勝ちゃん、取り分けて。

不器用にお節を取り分けようとする勝一。

克也

勝一、知ってるか？

勝一

なに？(海老を食卓に落として)あ、

博

よそ見をするな。

勝一

ごめんなさい。

克也

アメリカの海老はな、筍くらい大きいらしいぞ？

勝一

☆筍！？(と言ってまた食卓に落とす)あ、

ふく

☆ほんとに！？

博

(自分で海老を取りながら)何でもでかいだけが取り柄の国なんだよ。

勝一

あ…。

克也

…それで？明日は何をお願いするんだ？

勝一

あ、うん、俺明日ね、日本国の勝利はもちろんお願いするけど、

博

よく言ったぞ、勝一。

克也

するけどなんだ？

勝一

けど、あの、うん、あと一つ…、お父さんの目がよくなるようになって。

一瞬の沈黙。これまで箸を持っていた勝一は、いつの間にか手掴みでふかした芋を配っていた。

勝一

…なんか俺、よくないこと言ったかな？

ふく

いいえ、立派よ。

博

それでこそ日本男児だ。

克也

よくなるわけがないさ、

博

おい。

克也

甲種検査に落ち続けてるんだから。

博

水を差すなよ。

木村寿美(以下、寿美)、「生」の入口から登場。

寿美 お母ちゃん、  
ふく あら寿美ちゃん、初日の出を見るんじゃなかったの。  
寿美 眠れなくて。  
ふく かわいそうに。嫌な夢でも見た？  
寿美 ううん、あ、うん、  
克也 ★なんだよ。  
博 ★はつきりしなさい。  
寿美 嫌な夢も見ただけけど…、  
博 ……どうした？  
寿美 ……やっぱりなんでもない(と言って座る)。  
ふく 寿美ちゃん、  
勝一 寿美、これ、俺の芋、やるよ。  
勝一 え、いいの？  
勝一 うん。  
寿美 ありがとう。…あ、ううん、やっぱりいい。  
ふく ☆どうして？  
勝一 ☆どうして？  
克也 ☆どうしてだよ。  
寿美 お兄ちゃん、後で絶対文句言つもの。  
勝一 言わないよ。  
寿美 言つもん絶対。俺のお芋って言つてたし。  
勝一 それは、  
寿美 それはみんなのお芋でしょ？お兄ちゃんのお芋じゃないもん。  
克也 ★難しい子だな、おい。  
勝一 ★じゃあやらない！(と言って芋を食べる)  
寿美 ☆あー！！  
ふく ☆あー！！  
克也 ☆立ち上がり(あー！！！！！！！！)  
博 ★(克也に)なんで一番驚いてるんだ！  
寿美 ★(こたつに突っ伏して泣く)  
ふく ☆勝ちゃん、謝りなさい。  
克也 ☆(立ち上がった)こんな時でも愉快的な家族だよ。なあ？  
勝一 なんて俺が！  
ふく もう…、

克也が縁側に煙草を吸いに向かうと、突如博が大声を上げる。

博 あ！！！！！！！  
ふく え？  
克也 今度はなんだ？  
博 や、腹が…、  
ふく 腹が？  
勝一 大丈夫？  
博 やあ、配給の酒に当たったかな？  
克也 なんだそれ(灰皿にあるシケモクを探し出して火をつける)。  
博 ちよつと厠に行ってくる。  
ふく ?ええ。  
博 だから寿美。  
寿美 …なに。  
博 お父ちゃん是要らないから、お父ちゃんの芋★食べて…  
寿美 ★みんなのお芋。  
博 みんなのお芋。食べていいぞ。  
寿美 …はい。  
博 お兄ちゃんといっしょにな。  
勝一 ☆はい。  
寿美 ☆はい。  
博 なあ、ふく。  
ふく はい、え、私!?そんな名前です…、どうしたんです?珍しいあと厠  
博 は?  
博 いや、明日の初詣のあとはひさしぶりに、高尾の方にハイキングで  
博 も行こうか。  
寿美 ★ハイキング?  
克也 ★おいおい、散歩と言えよお前。馬鹿だな。  
博 な?  
ふく ええ、でも今は…、  
博 じゃあ、戦争が終わったら。  
ふく もちろん。  
博 決まりだ。(歩き出して)じゃあ勝一、珈琲を淹れてくれ。  
勝一 ☆いいの?  
ふく ☆あなた。  
博 ああ、お前が淹れたのを飲みたいんだ。  
勝一 (ゆっくりと敬礼する)

ふく　ねえ、あなたったら。

博　ん？

ふく　厠はそちらじゃないわよ。

笑顔を見せた博、「死」の出口に退場。  
博を見届けた勝一は、一度廊下に退場。

克也　：寿美、明日はきつといい初日の出が見えるぞ。お母ちゃんに見に行っておいで。

寿美　克也おじさんは行かないの？

克也　俺も？俺は…、

ふく　克也さんはお奉仕がありますものね。

克也　そうだな。今年は流石に、うん。

ふく　克也さんの一番祈祷、楽しみだわ。

克也　ああ。

寿美　私たち3人で行って強盗にでも出くわしたら克也おじさんのせいだからね。

ふく　

克也　なんてこと言うようになったんだお前は。勝一がいるだろう。

ふく　ねえ克也さん、宮司さんにはいつなるの？

克也　手続き次第、早ければ年明けに、

寿美　え、宮司さんになるって何？宮司さんって名前じゃないの？

ふく　なにあなた、宮司さんのこと、田崎宮司さんて名前だと思っただの？

寿美　え、うん。え、違うの？

克也　宮司ってのは役職でね、会社でいう社長のことだよ。

寿美　(困惑して)…。

克也　それは分かれよ。

ふく　ともかく、偉くなったの克也さんは(酒を飲み始める)。

寿美　偉くなったのね！お年玉も増える？

克也　成長著しいな、お前は。

ふく　なにせよ素敵なことね。博さんが聴いたらきつと喜ぶわ。

克也　ふくさん、平気なのかい？

ふく　ぜんっぜん平気よ私は。ひ孫を見るまで死ねませんもの。

克也　気が早えな。

ふく　克也さんこそ平気なの？

克也 俺が？どうして？  
ふく 博さんしか友達いないじゃない。  
克也 親子だな、お前たちは。

眼鏡をかけた勝一、廊下から登場。コーヒーをお盆に乗せて持ってきた。

勝一 やあやあ、お待たせしました。

克也 博？

勝一 勝一ですよ、やだなあ。

克也 なんだ、お前か。

勝一 (「コーヒーをそれぞれに配りながらそんな歳じゃまだないですよ。さ、召し上げれ。

克也 なあおい、俺今日コーヒー飲み過ぎじゃないか？

寿美 コーヒーはまだ一杯目よ。

克也 は？

克也、いつの間にかまた酒を飲んでいて、

寿美 飲み過ぎているのはお酒。

克也 あれ？

ふく あれ、いつの間に飲んでいたんです？

勝一 さっき小百合ちゃんにせがんでいたんだよ。

寿美 女中が戻った途端これなんだから。

ふく 肝臓は大丈夫なの？

克也 日本の復興とともに、俺の肝臓も復興し始めているんだよ。

勝一 復興が始まる前から飲んでいたじゃないですか。

克也 一番祈祷には胆力が必要なさ。ほら、お前もやるか。

勝一 せっかく淹れたのに。

克也 じゃあ飲んでやるから、こっち(煙草)を付き合え。

寿美 ねえ、もう30分で年明けよ。

克也 じゃあ吸い溜めしないとな。

寿美 もう。

克也 (立ち上がって)勝一、煙草くれ。

勝一 (立ち上がって)ああ。

寿美 ねえ、栗きんとん美味しい。

ふく トミおばあちゃんに教わったのよ。

寿美 来年は私も作るね。  
ふく まあ、楽しみ。

縁側にコーヒーを置いた勝一が克也に煙草を差し出す。

克也 なんだコレ。  
勝一 キヤメルって言うんだ。  
克也 (受け取りながら)アメリカのか？  
勝一 ★マッチで火をつけてやりながらっん。  
ふく ★流行ってるんですって。若者の間で。  
克也 ちよっと前に爆弾を落としてきた奴らの煙草をねえ。

と言って煙草を美味しそうに吸う克也。

勝一 ちよっと前って…もう5年ですよ。終戦から。  
克也 5年？もうそんなに経つのか。俺はもう時間というものがとんと分  
からん(と言って「コーヒーを啜る」。  
寿美 え、克也さんて幾つ？  
ふく 五十、☆二？  
勝一 ☆どう？  
克也 ……まずい…。  
勝一 え？  
克也 お前の淹れるコーヒーは、本当にまずいなあ。  
勝一 そこまで言わなくても。  
ふく まずいわ。いつも。  
寿美 泥みたい。  
勝一 おかしいな。え泥？お父さんと同じ淹れ方のはずだよ。  
克也 いやまあ、いいじゃないか。まずいコーヒーを飲むと、旨いコー  
ヒーのことを思い出せるものだよ。  
勝一 なにをちよっと名言みたく言っているんですか。  
克也 気づいたか。  
勝一 美味しいと思うんだけどな。

ふく、いつの間にか立ち上がり、「死」の出口の方を見ていて、

寿美 ……お母さん？

ふく　なんです？

寿美　泣いてるの？

ふく　馬鹿ね。泣いてなんかいないわ(と言って、蓄音機の方へと歩みを進める)。

寿美　大丈夫？

ふく　…さ、踊りましょうか。

勝一　なんで？

ふく、蓄音機で陽気なスウィング・ジャズを流す。

勝一　え？え？え？なに？なに？

1人、踊り狂うふく。

寿美　お母さん、かつこいい…。

ふく　昔一度行ったことがあるの、ダンスホール。お父さんといっしょに。

克也　その時流れていたのはこんなじゃないだろう。

ふく　ほら、あなたたちも。

勝一　やだよ、みつともない。

ふく　勝一は根暗なんだから、太宰ばかり読んでないで踊り狂ったほうがいいわよ。

勝一　太宰は関係ないだろ。

ふく　いいから、ほら。

しづしづ立ち上がったと見えた勝一、キレイく踊り始める。

ふく　あら勝ちちゃん、上手じゃない。なんというか、独特な踊り。

克也　★褒めてないぞ、それは。

勝一　★ちよっと最近ね、うん。

寿美　私知ってる。お兄ちゃんダンスホールで女の子引っ掛けるの。

ふく　☆え！

克也　☆な！

勝一　☆おい！人聞きの悪いことを言うなよ。言葉の順番が違うだろ。女の子とダンスホールに行ってるだけだっただけだっただけだ。

ふく　★え！

克也 ★なー！（日本風に踊り出す）  
勝一 うるさいなあ！やらないんじゃないの？  
克也 こつも毎年踊られたら、踊らにや損々だろ。  
勝一 阿呆だなあ。俺たちは。  
克也 なんて言うんだ、その子の名前は。  
勝一 正に園子って言うんだよ。  
ふく 寿美は？いい加減あなたも踊りなさいよ。  
寿美 どうして？  
ふく へ？  
寿美 どうしてお母さんは踊るの？私それが、わからないの。  
ふく どうしてって…、気持ちを言葉にできないから、それを踊りで表現しているのよ。

木村園子(以下、園子)、玄関から踊りながら突如、登場。

園子 私分かります、その感じ。  
ふく あら、気が合うのね私たち。  
勝一 お母さんと園子のお母さんは、誕生日が同じだからね。  
園子 ☆うん。  
ふく ☆まあ！ますます実の娘だと思って可愛がってしまっわ。  
ふふ、★うれしい。  
克也 ★そんなこと言うと、実の娘が機嫌を損ねるんじゃないか。  
寿美 もう私、そんな子どもじゃありません。  
勝一 子どもじゃないなら、とつととお前も嫁いだらどうなんだ？もつじき22になるんだから。  
ふく いけないわ、私、ちゃんとあなたにいいお相手を見つけなくっちゃ。  
寿美 いいのよ私は結婚なんて。ずっと私はこの家で、お母さんと年を越すの。それとも私はお邪魔？とつとと家庭に入れって思う？  
ふく でも私、きつとあなたより早く死ぬわ。  
寿美 え？

ふく、大きな咳をする。おばさん、というより、おじさんっぽい大胆な咳だ。と同時に、音楽も鳴り止む。  
口々に心配する一同。

ふく 大丈夫。大丈夫よ。孫の顔を見るまで死ねません。  
克也 弱気になってるじゃないか。

ふく いやだわ克也さん、現実的になっただけよ。  
寿美 現実的になんてならないで。

ふく ねえ、違うのよ。勝札だって、当たれ当たれ！って思ったら当たらないでしょ。そういうことよ。

克也 心では当たれって思ってるんじゃないか。  
勝一 それに今は宝くじって言うんだよ。

ふく そうでした、宝って(また踊ろうとして)小躍りしたくなる言葉ね。  
勝一 ☆(止めて)もういいだろっ、今年は。

寿美 ☆お母さん！

ふく 冗談よ。宝と言ったらあなたたちも早く子宝に恵まれるといいわね。

園子 ええ。来年こそはと思ってるんですよ。

勝一 男の子がいいな。美味しいコーヒーを淹れることできる、男の子。  
克也 お前の息子じゃあどうだろうな。

勝一 うるさいな。

克也 このままじゃ、早晚店を畳むことになるぞ。  
ふく 寿美がもう少し、お店を手伝ってくれたらいいのに。

寿美 日曜まで働いたちゃったら私、体が持たないわ。教師って意外と大変なんだからね。

勝一 そんなに大変なら、学校の近くに越したらいいじゃないか。

寿美 またそうやって私を★追い出そうとして。

勝一 ★そういうつもりじゃあ、

ふく いいのよあなたが、居たいだけ居て。私たちの家はここしかないんだから。

「生」の入口から、女中がおくるみを持って登場。

園子 (歓声を上げて)ほらあなた！あの子が起きたわよ！とってもかわいい声で泣いてるわ！

しかし女中は、真っ直ぐに、「死」の出口へと退場する。

園子 なんで…！なんでこんな酷いことが起きるの！うちには神棚だってあるのに！

克也 …。

勝一 お前は働きすぎなんだよ。これからは店をもっと俺に任せて、

園子 …。

勝一 どうした？

園子 …私が悪いって言うんですか？

寿美 ☆園子ちゃん。

勝一 ☆どうしてそうなるんだよ？

園子 私の体が強くないから、あの子も強く産んであげられなかったっ

て、そういうことでしょ？

勝一 お前の体は強くないだろ、あんなに激しく踊っていたじゃないか。

園子 じゃあもう踊らない。踊るのなんて以ての外！誰よ大晦日に最初に

踊り出したのは！

勝一 …(何も声をかけられず)。

ふく ほーら園子ちゃん、少し夜風に当たってみましょう。お月様がこちらを見ているわよ。

園子 ええ…。

ふく、園子の肩を抱いて縁側へ連れて行き、腰を掛ける。  
遅れて勝一、園子の傍に座って手を重ねる。

寿美 私、お店を手伝おうと思うの。

ふく いいのよ。夢中になって時間を早めることだって、悪いことではな  
いんだから。

勝一 年が明けたら、旅行に行こうか。江の島でも、小田原でも、

園子 …まだ寒いわ。

勝一 じゃあ春が来てからでもいい。

園子 春が来てくれると、いいんですけど。

ふく …(囁をもすがるように)何かいいお話を聴かせてくだらない？

克也 (呆気に取られて)俺が…？

ふく 宮司さんでしょっ？

克也 都合のいい時だけ担ぎ上げて…、

寿美 でも、って言うのもなんだけど、克也さんなんだか最近お顔の調子

がいいみたい。

ふく 言われてみればそっね、何かあったの？

克也 ああ…宝くじがね、

ふく ★ほんとに!!!?

寿美 ★うそ!!!?

克也 早い早い早い、話を聞けよ。

ふく いくら当たったの？白状しなさい。

克也 聞けって。いやすまん、違うんだ。宝くじって言っちゃあいけないな。

ふく なんです？

克也 養子を取ることにしたんだ。

勝一と園子、話に加わり始める。

寿美 ☆養子？

園子 ☆養子？

ふく ☆養子？

勝一 ☆養子って、いくつの？

克也 13になる。

全員 13!!!???(宝くじのテンションが冷めやらず)

克也 えなにが？なにがなにが？

ふく 13って…、

克也 ん？

ふく (何かを言いかけるがいえ、割に大きいのね。どうして急に?)

克也 まあそのあれだ、俺も還暦を過ぎたしそれに、オリンピックも近いし。

園子 どう関係があるの？

勝一 ★さあ。

ふく ★後継ぎってこと？

克也 おいおいよしてくれよ、これから仕事なんだ、細かいことは年が明けたら。

田崎春彦(以下、春彦、縁側から登場。

春彦 お晩です。

克也 ☆おお。

ふく ☆あら春彦さん。

春彦 どうも。宮司さん、そろそろ。

克也 まだいいだろう、

春彦 艶子叔母様が探しています。  
克也 放っておけよ。  
ふく 艶子さん、帰ってきてるの？  
園子 艶子さんって？  
勝一 ★克也さんのお姉さん。  
克也 ★旦那の会社が上手くいってないんだかんだか知らないけど、この歳になってようやくね。  
ふく そう、大変なのね。さ、どうぞかけて。  
春彦 ☆どうも。  
克也 ☆元が出しゃばりな姉だから、あれやこれや仕切り始めてるよ。どの口が神社を語るんだか、居心地が悪くて仕方ない。  
ふく 口が悪いわよ、克也さん。

「生」の入口から、女中がおくるみを持って登場。  
見るなり、走って近寄る園子、続いて勝一、ふく。

園子 (赤子を受け取って)今度こそ元気に育ててあげるからね、お願いよ。  
勝一 頼むぞ、お前。  
克也 東京タワーみたいにスクスク大きくなるだろうな。この分じゃ嫁を取るのも時間の問題だぞ(と言いながら再び縁側に煙草を吸いに行く)。  
園子 この子は女の子ですよ。ねえ、ちーちゃん。  
ふく 克也さん、お宮詣りのご祈念、どうかお願いしますね。  
克也 はいはい。  
春彦 宮司さん。  
勝一 ああ、男の子も欲しいな。美味しいコーヒーを淹れることのできる、★男の子。  
園子 ★あなたの息子じゃどうでしょうね。  
克也 ☆(笑う)  
勝一 ☆お前。  
ふく ほら、眠ったんじゃない？すっかり園子ちゃんもお母さんね。  
園子 おかげさまで。あっちゃん、お願いね(と言って女中に赤子を返す)。

女中、廊下へ退場。

春彦 宮司さん、お医者様にまた叱られますよ。

克也 固いこと言うな。本年最後の一服だよ。

ふく 春彦さんもういいんじゃない？お義父さんて呼んであげても。

春彦 ★それは、

克也 ★甘やかしてやるな。住み込みのつもりでいてもらわないと。

寿美 自分以外には厳しいのよね。

園子 他に誰もやさしく☆してくれないんだよ。

克也 ☆春彦さん、野球の調子はどう？

園子 こいつら聴いてねえな。

春彦 最近になって4番を打つようになりました。

園子 ★4番！…って凄いの？

勝一 ★凄いやないか！高校1年生だろ？

春彦 ☆ええ。

寿美 ☆凄いのね。

園子 ☆凄いなだわ。

勝一 後の長嶋茂雄になるかもしれないね。

園子 ★長嶋！？(は知ってる)

寿美 ★長嶋！？(は、やはり知ってる)

克也 まあ、春彦の本命はこっち(投げる方)なんだがな。

園子 ☆こっち…？

ふく ☆こっち…？

勝一 ☆今からサインをもらっておかないとな。有名になったら言ってくれよ。木村喫茶のカレーで育ったんだって。

寿美 なにが木村喫茶のカレーよ。

勝一 なにが…？

寿美 なんの工夫もない、ワンタッチカレーじゃない。

園子 ★そうですよ。

勝一 ★お前は一言余計なんだよ。だから嫁ぎ先も見つからないんだ。

ふく ☆勝一。

園子 ☆勝一さん。

寿美 ☆それとこれとは関係ないでしょ。

勝一 そうとも言い切れないんじゃないかな。どうせ見合いの席でも余計なことを言っているんだろ。「僕の家に嫁いでくれませんか？」

ふく 「僕の家じゃなくて、みんなの家でしょう？」なんて。

★勝一、やめなさい。

寿美 ★何年前のことをほじくり返すのよ。

克也 ★そんなことも言っていたなあ。

春彦 どういう話ですか？

克也 やあ、昔寿美がな、

ふく ☆克也さん。

克也 ☆戦時中の大晦日に言ったんだよ、勝一とあと、こいつらの父親に。「俺の芋をやる」って言ったら、「みんなのお芋でしょ」ってやめてよそんな話。

春彦 …。

克也 なんだよ黙って。笑えるだろう？

春彦 いや、だって、やさしいじゃないですか。末っ子なのにみんなのことを考えて。何が笑えるのか、僕にはよく分かりません。

寿美 …。

克也 …そら、酒くれ、勝一。

園子 ねえ、

勝一 (寿美の方は見ずに酒を運び)…。

寿美 意地っ張り。

園子 あ、ご飯召し上がる？

春彦 いただきます。

園子、一度廊下へ退場。

ふく ふふ、ご立派ねえ、春彦さん。さすがは東京都きつての剛腕だわ。

春彦 ★いえ。

克也 ★はは、本当嫌になっちゃうよ、人の成長っていうのはさ。こいつ最近、立教に行く、なんて言うんだぜ。

ふく 野球で？凄いいじゃない？

克也 とんでもないよ、うちの家系は神主になるんだ。野球は神道学科でやってもらわないとな。

ふく それももちろん立派なお役目だわ(と言って廊下へ退場)。

勝一 もつたいない。

園子、廊下から戻ってきて、お米の入ったお茶碗を春彦に渡す。

春彦 いや、まあ、言ってみただけですから。

克也 現実的にならないといけないよ。いつまでも意地を張っていると、

どっかの喫茶店みたいに閑古鳥、誰からも見向きされなくなっちゃまうからな。

勝一 …(酒を飲んでいる)。

寿美 でもいいの？本当に？長嶋になるんじゃないの？

春彦 だから俺は投手だって。

寿美 よく分からないけどどっちもやればいいじゃない。

☆勝一が酒をせびり、園子は酒を取りに廊下へ退場。

春彦 ☆ははっ、そんな選手が出てきたら逆立ちでお節食ってあげるよ。

寿美 おかわりは？

春彦 結構(と言って縁側に行き、克也と並ぶ)。

勝一 (廊下に向かつて)園子ー？酒はまだかー？

克也 (煙草に火をつける春彦を見て)…春彦、体に悪いぜ。

春彦 …お義父さんに言われたくないですよ。

克也 …(鼻で笑って)。

気づけば、勝一が酒を呷り続けている。

園子 (廊下から水を持って戻ってきて)ねえあなた、飲み過ぎよ。

勝一 水じゃなくて、酒。

園子 そんなに飲むと克也さんみたいになっちゃうわ。

春彦 ★おお、おお。

克也 ★どういことだい？☆園子ちゃん、それは。

勝一 ☆年末くらい俗世を忘れさせてくれよ(と言って立ち上がる)。

千鳥足で「死」の出口へと向かおうとする勝一。

園子 どこに行くのよ(と言って勝一の腕を掴む)！

勝一 便所だよ、うるっさいなあ(暫しの押し引きの後、園子の腕を振り

払う)……あ、

勝一、「死」の出口に片足を突っ込むが、園子が再び勝一の腕を掴み、引っ張って勝一を居間に戻す。口々に心配する一同。

勝一 もう駄目だ…俺は…。

園子 弱気にならないでよ。

克也 何がそんなに駄目なんだよ。駄目は元々だろ。

春彦 お店はどうかになってるじゃないですか。

勝一 園子ちゃんのお陰でね。車にぶつかられるなんて馬鹿みたい。うるせえ！

園子 勝一さんは小説が書けないのよ。

克也 ★小説？初耳だぞ、お前。

春彦 ★はい？え？

勝一 言うなよ、それを。

園子 言いますよ、もうすぐ年も明けるんですから。厄落しです。

克也 女房にここまで言わせてお前、すっかりしろよ。

春彦 だいたい面白い小説って、どうしたら書けるようになるんです？

克也 それが分かりや、☆苦労しないだろ。

勝一 ☆よく訊いてくれたな！春彦くん。退廃、虚無感、はたまた絶望、それらを煮詰めて戦後の文学は発展したわけだよ。

春彦 ★お酒臭いなあ。

寿美 ★もう戦争から20年以上☆経ちますけどね。

勝一 ☆だから今、店が傾き車に轢かれた俺は、作家としての偉大な一歩を、

園子 断じて無理よ、あなたには。

勝一 ★おおい！どうしてだよ？俺には才能がないって言うのか？

克也 ★言うねえ、なかなか。

園子 だってあなたは幸せじゃない。

勝一 そう…だよ、だから俺は、

園子 家族みんながお店を手伝ってくれて、智恵だってまっすぐ育て、他に何が欲しいって言うんです？

走って「生」の入口へと去った園子、すぐさまおくるみを持って登場する。

園子 ほら、見てください、健ちゃんの寝顔を。

克也 大きくなったなあ、健太。東京タワーみたいに☆スクスク…

園子 ☆ちよつと黙っててください。

克也 ★ああ、ごめん。

園子 ★健ちゃんのこの寝顔を見ながら、不幸せだってあなたは言える？不幸せになりたいってあなたは言える？

勝一 それとこれとは、違うだろう…。☆現に…、

☆暫し席を外していたふく、すき焼き鍋を持って廊下から登場。

ふく ☆はいはい、すき焼きが上がりましたよ。

寿美 ★すき焼き!?

春彦 ★すき焼き!?

克也 ★凄い時にすき焼き持ってくるんだな、ふくさん。

ふく 凄い時って何? すき焼き食べる以上に優先する時があります?

勝一 うちのどこにすき焼きを食う金があるんだよ?

ふく 私のへそくりを見くびらないでちょうだい。

園子 すみません。ありがとうございます。

ふく 謝らないでくださいな。私はあなたたちと、二人のかわいい孫に囲

まれて幸せなの。

勝一 でも金が、

ふく そんなの。50年もしたら全部忘れてしまっわ。覚えているのは誰

といたか、そういう些末なこと。それだけよ。

寿美 はい、卵。

ふく ほら勝一、好物でしょう。

勝一 …ああ。

みなそれぞれに、卵を割る。上手く割れなかった勝一は卵の殻を取り出す。

克也 全く、なんでお前たちは俺が仕事に行く時にすき焼きを食い出すんだよ。

木村家 いただきます。

克也 おいおい。商売繁盛の神様がそっぽを向くぞ、お前ら。

木村家一同、肉を喰らい、口々に「うまい」、「おいしい」など言う。

克也 ったく…。

寿美 (モ「モ」しながら)春彦さんも召し上がったら?

春彦 いえ僕も、ご奉仕が☆あるので、

克也 ☆ああ、せっかくのお誘いなんだ、頂戴しておけ。

春彦 え?

克也 どうせこの先、年越しですき焼きなんて頂けないぞ。

春彦 でも、

克也 やれ安保闘争だとか、天皇様の襲撃だとか、何が起こるか分かった  
もんじゃない。

勝一、テレビの電源を消しに行く。

園子 今年の紅白は、どっちが勝ったの？

克彦 ★聴いてねえなこいつら。

勝一 ★ああ、紅だよ。

寿美 あら、今年は紅が勝ったのね。

ふく 感動しちゃった。美空ひばりの『別れてもありがとう』。見なぞ

い、森進一あの悔しそうな顔。

克也 ☆元から悔しそうな顔だろと言って、縁側へ向かう。

勝一 ☆何が楽しいんだあんなの。歌って歌ってただ歌って。

寿美 そう言いながら毎年観ているくせに。

園子 来年こそ私、観させてもらいますから。

勝一 そんなにか？

春彦 宮司さん、時間ですよ。

克也 (煙草を吸おうとしていたところでおお、そうだった。

克也、名残惜しそくに「死」の出口の方に歩みを進める。

克也 もう少し、やりたかったな。

春彦 もう十分でしょう。

克也 寂しいことを言うなよ。

ふく ご奉仕頑張ってくださいな。

園子 明日智恵と健太も連れて行きますから。

克也 来い来い。(出口の極めて近くで)なあ、春彦。

春彦 ★はい？

勝一 ★(肉を取ろうとする)

園子 ☆お肉、取りすぎよ。

克也 ☆巨人は今年も勝つかな。

勝一 ★いいだろ。

春彦 ★勝ちますよ、きつと。

克也 負けたらいいな。

春彦 どうして？

克也、何かを言いたげに「死」の出口に退場した。

寿美 …行かなくていいの？

春彦 え？

寿美 一番祈祷。

春彦 …艶子さんに言われたんです。一番祈祷は息子にやらせるから、僕は二日からでいいって。

寿美 息子って…、

勝一 正司くん？あの正司くん？

ふく まさかあの子に継がせるつもりなの？

☆ふく、ゆっくり立ち上がると、神棚の前まで行き、二礼二拍手一礼する。その後、縁側の方へとゆっくり歩いていき、腰を掛ける。

勝一 ☆神職の免許取ってたのか？

春彦 今年の夏に。お義父さんも渋々了承したみたいで。

勝一 アイツロクでなしだろ？神社の経営なんてできるのかね。

春彦 そのあたりは艶子さんが。

寿美 まるで傀儡政権じゃない。

春彦 やあ…。

ふく 克也さんで、ご立派だったのね。

園子 …春彦さん、そしたら元旦お暇ってこと？ご予約はあるの？

春彦 ああ、野球部の仲間と…、最近知ってますか？歌えるジュークボックスがあるんですよ。

園子 ★歌える？

ふく ★よくわからないけどなんだか楽しそうね。

寿美 歌えるってどういうこと？

春彦 ジュークボックスにマイクを繋げて、歌の入ってない音楽に合わせて自分たちで歌うんです。

ふく ☆ハイカラねえ。

勝一 ☆春彦くんまで、そんなに歌うのが楽しいのかい？紅白も観てないくせして。

寿美 ★偉そうに。

春彦 ★うーん、何でしょうね。

園子 理屈じゃないのよぎっと。若者が流行ってるって言うんだから、流行ってるんだわ。

勝一 ふーん。  
寿美 私美空ひばり歌いたい。  
春彦 いいですね。  
園子 私、ドッドドリフ！  
春彦 ☆ドリフですか！  
寿美 ☆園子ちゃん、ドリフ好きだったの？  
園子 ★ちよっとね。  
勝一 ★ドリフは紅白出ていないだろ。  
春彦 寿美さん、いっしょに行きますか？  
寿美 え、私？  
春彦 はい。いつも家族の初詣のあと、暇だっておっしゃっているので。  
寿美 え、私？  
春彦 ☆はい。  
勝一 ☆2回言ったぞ、お前。  
春彦 どうですか？  
寿美 私おばさんよ？  
春彦 そんなことは。  
寿美 いや、ごめんね、えーとありがとう、どうしよう、えーと私お母さん、私いっしょに、

寿美、ふくがうたた寝していることに気付く。

寿美 お母さん！？  
ふく (目覚めて)あ、私は尾崎紀世彦。  
寿美 ★びっくりしたー。  
勝一 ★なんの話だよ。  
ふく あれ？紅白の話をしていなかった？  
園子 ええ、まあ。  
勝一 なあ母さん、一大事だよ。寿美が春彦くんからダイエットに☆誘われているんだ。  
寿美 ☆やめてよそういう言い方は。  
ふく あら素敵。ゆっくりしてきなさいよ。  
寿美 でもお母さん、1人で平気？  
ふく 平気よ。こうして縁側にいるとね、お父さんがそばにいるみたいに思えてね、  
勝一 ★これ、明日の話って分かってるのかな。

寿美 ★私明日ね、ジュークボックスで歌ってこようと思うの。  
園子 どうなのかしら。☆一度お医者様に観てもらった方が、  
ふく ☆あら素敵。私もひさしぶりに踊りたいわ(と言って立ち上がった)。

勝一 ★母さん。

寿美 ★お母さん。

ふく はいはい。私はあなたたちのお母さんですよ。

勝一 ☆知ってるよ。

寿美 ☆わかったから。

ふく あ、

勝一 え。

寿美 なに。

ふく …除夜の鐘。

家の外から除夜の鐘の音が聴こえる。

縁側から窓の外を見ている他の一同をよそに、ゆっくりと「死」の出口へと歩みを進めるふく。

寿美 …お母さん、私やっぱり明日…、

園子 ねえ。そのマイク付きのジュークボックス、うちでも買いたしようよ。

勝一 はあ？

園子 お店に置いて、お客さんがいつでも歌えるようにするの。名案じゃない？

勝一 そんなの聴いたことがないよ。

園子 聴いたことのある商売をしてもしようがないでしょう。

勝一 ええ？

園子 それにそうすれば、うちの家族はいつでも歌い放題。そしたらお義母さんだって…、

勝一 うち純喫茶なんだぞ？親父が聴いたらなんて言っか。ねえ、母さん…、

ゆっくり歩みを進めていたふく、「死」の出口の極めて近くで振り返り、

ふく 今年も一年、お疲れ様。

尾崎紀世彦の代表曲『また逢う日まで』のカラオケ音源が流れる。  
この歌の間は、ふくの走馬灯、そして寿美の子供の頃の回想である。  
春彦がマイクを持って歌っていて…

寿美　お母ちゃん、  
ふく　あら寿美ちゃん、初日の出を見るんじゃないの。  
寿美　眠れなくて。  
ふく　かわいそうに。嫌な夢でも見た？  
寿美　ううん、あ、うん…、ねえお母ちゃん、人って死んだらどうなっちゃ  
うの？  
ふく　へ？  
寿美　お兄ちゃんは絶対馬鹿にするけど私、死んだ後のことを考えると眠  
れなくなっちゃうの。  
ふく　寿美ちゃん…、あなたは偉いわ。  
え？  
ふく　あるわよ。誰にだってきつと。みんな口に出すのが怖いだけ。  
寿美　そう？  
ふく　だから、はずかしがることはないわ。  
うん。  
ふく　それでね、結論から言つとね…、これ、私と寿美ちゃん二人だけの  
秘密よ。  
寿美　なに、え、なに、怖い。  
ふく　…宴が行われるのよ。  
寿美　宴？  
ふく　そう。こう、死ぬでしょ？  
え！  
ふく　たとえばよ。こう、死ぬでしょ。それで、パツと目を覚ますとね。  
寿美　「ふくさん、人生おつかれさま！乾杯ー！」ってされるのよ？  
ふく　え、誰に？閻魔様？  
寿美　馬鹿ね。先に死んだ人たちによ。「あれ？え、あなた？死んだん  
じゃなかったの？」「落ち着けふく。いやどうやらな、生と死とい  
うのは表裏一体らしいんだよ」なんて、小難しいこと言われたりす  
るわけ。  
寿美　嘘だよそんなの。  
ふく　嘘じゃないの。  
寿美　絶対嘘。絶対気休め。

ふく 嘘なんてつきません。それに確かめようのないことでしょう。

寿美 そうだけど。

ふく それに気休めって、そう悲観的な言葉でもないのよ。箸休めの栗きんとんといっしょ。気休めの言葉があるから、おいしい人生を味わえるわけ。

寿美 意味がわからない。

ふく 寿美ちゃん。これだけは絶対本当だから聴きなさい。

寿美 なに？

ふく 死ぬのがどんなに怖くても、あなたが死んだら私が最初に「お疲れ様ー！また会えたねー！」って労ってあげる。約束よ。

寿美 …うん。

ふくと寿美、2人で『また逢える日まで』をデュエットする。

それは実際には叶わなかったことでもあるし、一つの弔いなのかもしれない。やがて、ふくは「死」の出口へ退場した。

後奏の中、溶暗。

除夜の鐘が鳴り、年が明けるー。

【二幕】

暗闇の中、郷ひろみの代表曲、『2億4千万の瞳』のカラオケ音源が流れる。  
ミラーボールが先に灯り、溶明。勝一がマイクを持っている。

勝一

マイクチェックワンツー、マイクチェックワンツー、アーアー、アーアー、レディースエンドジェントルメン、ご来場のみなさま、ここまで木村家の歴史をご静聴いただき誠にありがとうございます。酒屋から純喫茶、純喫茶からカラオケ喫茶と、激動の50年を駆け抜けた木村家、ここから10年ちよつとはダイジエストでお送りいたします。ナンバーは、新御三家こと郷ひろみ・記念すべき50枚目のシングル『2億4千万の瞳』！だ！（Aメロの最初だけ歌い、♪見つめ合う視線の、（台詞に戻り）やり取りを我が妹・寿美と交わっていたかのように見えた春彦くんでありましたが、ジュークボックスで出会ったビジネスガールと電撃結婚！一子を儲けるも5年で離婚してしまいます！独り身になり、神社でも袖にされ、我々家族は春彦くんがいつ多摩から去ってもおかしくないと踏んでいます。意外にも彼は、この地に残ることを選びます。

木村智恵（以下、智恵）、続いて木村健太（以下、健太）、「生」の入口から登場。

勝一

オイルショックの影響で不況にあつた日本経済。高まる社会不安。しかし、カラオケ喫茶をいち早く始めた我が木村家は、そうした状況にも家族一丸となって立ち向かい、ビラを配り客を増やし、ついに店は多摩市きつての社交場として連日満員、生活は安定し、ついに念願のマイカーも手に入れました！GOGOGO！

園子

（マイクを勝一から受け取り）ディスコが流行り、長嶋茂雄が引退し、時代が確実に流れる中、寿美さんはこの家を離れて、多摩ニュータウンで一人暮らしを始めました。私も引き留めはしましたが、寿美さんの意思は固いようでした。私たち夫婦の子どもはというと、健太は勉強の好きな優等生に成長し、智恵ちゃんは恋多き乙女になりました。二人ともとても良い子に育って、ちーちゃんと私は私、ユーミンのコンサートに行っただんです。

智恵

（マイクを持っていて）ユーミンもいいけど、私はダンゼン中島みゆき。みゆきさんの「わかれうた」染みたわあ。さて、あんなに小さかった健太ももう高校生。私は新宿でOLをやっています。一人暮らし

しをしたいけど、ママもパパも過保護で…。時は1985年。時刻は深夜12時を回り、家族総勢カラオケ大会を終えたところですよ。

歌い終わった勝一、マイクを高らかに掲げる。

春彦 よっ！日本一(と言って拍手をする)！

勝一 (ロックシンガー風情で)ありがとう！ありがとう(と、悦に入る)！

園子、寿美、智恵は、勝一のことは蚊帳の外にして、ぜんざいを食べている。健太はテレビに向かって、ファミコンをやっている。

勝一 (蚊帳の外にされていることに徐々に気づき)…。

智恵 ねえママ、お餅固いよ？

園子 え、嘘？

寿美 あんたが急かすからでしょ。

智恵 だって、

寿美 元旦に、何をそんなに急ぐことがあるわけ？

智恵 それは…、

園子 え？なにになに？ママに教えてよ。

健太 なになになになに。

寿美 春彦さんお餅どう？

春彦 柔らかくはないかな。

勝一 (マイクで)うおおい！

寿美 ★うるっさいわね。

園子 ★ごめんなさいね。

智恵 ★笑ってうるさい。

勝一 なんだってそうやって俺を無視するんだよ。

智恵 パパのひろみ郷聞き飽きたもん。

勝一 昔は踊って喜んでたじゃないか。

智恵 ☆嘘だよ。え、ほんとなの？

寿美 ☆こないな小さい頃の話でしょ？

園子 本当よ。え、あら、12時回っちゃった？

健太 ★え。

春彦 ★あ、本当だ。

智恵 ★嘘。

園子 ★パパのせいでタイミング逃しちゃったじゃない。  
勝一 俺のせいじゃない、ひろみ郷のせいだろ。  
園子 じゃあみんな、今年もよろしくね。

口々に、新年の挨拶をして、

智恵 ねえねえ春彦さん、春彦さんの息子さんはさあ、初詣こないの？  
春彦 え？

園子 ☆ちーちゃん。

勝一 ☆お前はまた、答えづらい話を。

智恵 だってお父さんのご実家でしょ？お正月くらいたまにはねえ。

春彦 二人は毎年、旅行に出ているので。

智恵 いいなあ。私も旅行行きたい。

春彦 新婚旅行以来、結局行かなかったな。

園子 神社は土日忙しいですものね。

智恵 最後に多摩に来たのはいつなの？

春彦 ああ、艶子さんの葬式の時だから、4年前かな。

勝一 まだ4年か。あのばあさん、長生きしたな。

寿美 自由に生きてると寿命が伸びるのかしらね。

勝一 正司もパチンコ狂いだし、艶子さんが神社仕切ってから、口クな  
とねえな。

園子 でも、春彦さんのご奉仕が増えて、本当に良かったわ。克也さんが  
知ったら喜ぶと思う。

勝一 来年あたり一番祈禱を任されるといいよな。

春彦 まあ離婚した神職の一番祈禱なんて、縁起が悪そうですね。

一同 そ、そう？(など、歯切れの悪い返答)

智恵 でもでも、春彦さんが一番祈禱しちゃったら、こうしていっしょに  
過ごせないってことよね。

勝一 確かに、それもなんだか寂しいものだな。

園子 考えてみたら不思議なものよね。年越しをこうして、血の繋がりの  
ないご近所さんと毎年過ごして。

春彦 なんだかすみません。

園子 あらやだ。変な意味じゃないのよ。

寿美 無理にこちらで過ごさなくてもいいのよ春彦さん。もう克也さんは  
いないんだから。それにお母さんだって。

春彦 あいえ、僕は、

勝一 まだそんなこと言ってるのか、お前は。二人が死んで10年以上経つて言うのに。

寿美 忘れっぽい人が羨ましい。

勝一 ああ？

園子 ねえ健太、ぜんざい食べないの？ぜんざい。

勝一 そうだぞお前、いつまでファミコンやってんだ？

健太 テストでいい点取ったら好きなだけやっていいって言ってたじゃん。

智恵 言ってたわ。

園子 言ってたわね。

健太 姉ちゃん食べていいよ。

勝一 ★ったく…。

智恵 ★私もうお腹いっぱい。

寿美 ★凄いわ。あなたの学校で5位の成績なんて、どの大学でも行けるじゃない？

健太 ☆まあ。

勝一 ☆私立に行かせた甲斐があるってもんだよ。

寿美 うちの学校なんてもう、勉強どころじゃないわよ。

智恵 おぼさんの学校でも、いじめ流行ってる？

園子 流行ってるというか…、まああるわよ目を凝らしたら。

寿美 何が楽しくて人をいじめるのかしらね。

勝一 意外と、いじめられる方にも原因があるんじゃないか？

健太、こたつに向かい直ってぜんざいを食べる。

勝一 負けたのか？

健太 勝ってる途中。

春彦 健太、あとで将棋打とう。

健太 また痛い目合いたいのか？

春彦 今年は負けないぞ。

園子 やっぱり(ぜんざい)食べるんじゃない。

と、電話のベルが鳴る。

勝一 ★誰だ、こんな時間に。

★一目散に電話に向かう智恵。以下電話の間、同時に家族の会話も続く。

智恵

(電話を取ってもしもし木村です。うん…、私…)

え、なに？別に言うてしょ木村ですって。(笑って)もう、なによ。…あ、うん、おめでとー。うん…。よろしく。え、聴こえない…。(照れて)なに？新早々…。☆えー。

勝一  
健太  
園子

(惚けて)ああ、職場の、彼氏でしょ。彼氏に決まってるじゃない。やつぱりか…。(電話を聴いて)☆何言われたんだ？おい今何言われたんだ？

(勝一に)ちょっと静かにしてよ。

寿美  
園子

取り乱して。恥ずかしい。だめよあなた。嫌われるわ。

(電話に戻って)あ、うん、ごめん。今仕事中でしょ？ありがと。…うん、なに？…え、うん。…待って待って、本当に！…違うの違うの。嬉しくて。

勝一  
園子  
勝一  
寿美  
園子

結婚を前提にしないヤサ男か。元祖ヤサ男がよく言うよ。ああ？プロポーズでもされたかしら。プロポーズ！？

(勝一に)ねえ、ほんとにうるさい！

(電話に戻って)ううん、なんでもないの。…うん、待ってる。…じゃ、また。フアイト。…おやすみ。

寿美  
勝一  
春彦  
健太  
園子  
寿美  
園子

うるさいって。親に向かって全く…。まあまあ。「待ってる」って。何をかしら。(フアイトに)みゆきだ。みゆきだわ。

智恵

(電話を切って)ねえ、本当に勘弁してよ。

園子

★パパほら謝って。

勝一 ★いやいや、聴こえちゃってるんだからしょうがないだろう。  
最悪。

健太 デリカシーがないよ。

勝一 元旦に仕事してるってことは…さては神主だな？

春彦 (豪快に笑って)

智恵 つまんない冗談。

春彦 …。

勝一 なんにせよ、仕事中に電話よこしてきて、キザな男。

智恵 はいはい。

寿美 見苦しい。

園子 わざわざ仕事なのに電話してくれるんだから、優しいじゃない。  
私は好きよ。

☆健太、テレビの前に戻ってファミコンを再び始める。

智恵 ☆ありがとう。

春彦 健太？

勝一 まあ、いいさ。大事にしてくれるって言うんなら、年寄りも引っ込  
みますよ。

寿美 もうまもなく還暦なんだからね。

勝一 あとはお前が嫁に出て、健太がうちを継いでくれたら、思い残すこ  
ともない。小説を書きながら、たまにママと2人で旅行にでも行く  
よ。

園子 最初にそれを言い出してから、もう10年経ちますけどね。

勝一 だから、二人がさ。

智恵 ねえ、ママ、パパ、★あのね。

勝一 ★健太、何やってんだ。…なあ、健太。

健太 …何って、ドラクエ。

勝一 ゲームソフトを訊いてるんじゃない。勉強はどうしたんだ？

健太 いいだろ、正月くらい。

勝一 そうやってお前は受験に失敗したんじゃないか。

春彦 ☆勝一さん。

園子 ☆だめよそんなこと言っちゃ。

智恵 ☆やめてあげてよ。

寿美 ☆馬鹿、やめなさい。

健太 (舌打ちして)そうやってプレッシャーをかけるからだろ。

勝一 何？

健太 それに俺、たとえ大学受かってても、店継がないからね。

勝一 は？なあおい、どういうつもりだ？

園子 ★やめてっば。

健太 ★父さんは知らないかもしれないけど、カラオケボックスってのが流行ってるんだよ。

勝一 だったらなんだよ。

健太 個室でゆっくり歌えるしデートにも使えて、

勝一 ☆個室？

健太 ☆だからうちみたいにプライバシーのない店、そのうちデリートされるに決まってるんだってば。

勝一 横文字ばかり使うな！

寿美 ちよっと。

園子 ねえ、二人ともやめてよ。せつかくのお正月じゃない。

健太 こんな店の後継ぎなら生まれてくるんじゃないかなかった。

勝一 あ？お前なんて言った？こっち向け。…こっちを向け！（ファミコンのコンセントを引っこ抜く）

健太 あああああ！！

園子 ★勝一さん謝って！

寿美 ★何やってるのよ！

智恵 ★パパ！

勝一 はっ、ざまあみる！

健太、無言で勝一に近づき、勝一の顔を殴る。

園子 ☆(悲鳴)

智恵 ☆(悲鳴)

春彦 ☆健太。

勝一 ☆(倒れながら)痛ってえな、くそ！(起き上がって)思い知らせて…

寿美、勝一が踏んだ座布団を思いっきり引っ張る。

勝一 ってえ！！(倒れる)

智恵 ★おばさん！？

園子 ★寿美さん！？

春彦 ★寿美さん！？

寿美、勝一に裸絞めをかける。

勝一 おい放せ！死ぬ！死ぬ！

寿美 死ぬ！死ぬ！

勝一 ギブギブギブギブ！

寿美、腕をゆるめて、勝一は息も絶え絶えに起きあがろうとする。

健太、コンセントを繋ぎ直して、カセットを取り出し、フーフーしている。

勝一 ☆死ぬかと思ったあ…。

寿美

☆恥ずかしいの？元号も変わって時代が変わるって時に、こ  
なくならないことで喧嘩して。お母さんがいたらなんて★言うか…

健太 ★あああああ！

勝一 今度はなんだよ。

健太 まだだ…セーブが…3人賢者に育てたのに…シヨウ…ソノコ…チ

エ…、

勝一 なんでこいつは俺たちの名前口にしながら泣いてんだ？

智恵 健太はね、キャラに家族の名前つけて冒険してるの。

健太 ☆またやり直しだ…。

園子 ☆どうして？

智恵 友達がないから。

勝一 ★何か声を掛けてやりたいが…。

健太 ★もう駄目だ…(と言いながら四つん這いになって廊下の方へと歩

いて行く)。

園子 ねえ健太…、

春彦 どこへ行くんだよ。

健太 トイレ。

勝一 なあ、駄目は元々だる。ゲームだって受験だって、負けっぱな

しで…、

健太、既に廊下へ退場していた。

寂しい沈黙。

智恵 健太のぜんざい…、

園子 ああ…、ラップかけておけば後で食べるかしら。

寿美 …(勝一に)ねえ、  
勝一 なんだよ、また説教か？  
寿美 聞きなさいよちゃんと。私、健太はいじめられてたんじゃないかと思っ  
勝一 思っの。  
勝一 なんだよ突然。  
寿美 いじめられたんじゃなくても、からかわれてたとか。  
勝一 あいつのどこにからかわれるところがあるんだよ。  
寿美 察しが悪いわね。だから、お店のことよ。  
勝一 は？店？  
智恵 私も短大の時言われた。逢引き喫茶だって。  
勝一 そりやお前…、そういう奴らも中にはいるだろっ。  
智恵 そうかもしれないけど、実家がそっだと気まずいんだってば。  
春彦 思春期だとありますよね、そういうことも。  
勝一 思春期って春彦くん、健太はもう22だぜ(と言って煙草を吸いに  
園子 行く)？  
園子 いじめられてるって…、そんな風に思ってるなら、早く言ってくだ  
寿美 さればよかったのに。  
園子 は？私？  
園子 新しくお茶、淹れましょうね。  
寿美 ☆(ため息をつき)  
春彦 ☆あれ？また吸ってるんですか？  
勝一 付き合えよ。  
寿美 いいのよ、断って。  
春彦 …(迷った挙句勝一の近くへ行く)。  
勝一 なあ春彦くん、なんか景気のいい話はないのかよ。  
春彦 (煙草をもらい)長嶋がまた監督になったくらいですかね。  
勝一 どこが景気いいんだよ。監督としてはサッパリじゃないか。  
園子 (お茶の支度をしながら)そっだ。ねえちーちゃん。お付き合いして  
智恵 る人とはどうなったの？  
勝一 え。  
智恵 ああ、あの正月に電話かけてくるマンか。去年かけてこなかったか  
園子 ら別れたかと思ってたよ。続いているのか？  
智恵 続いているの？続いているわよね？  
勝一 まあ。  
寿美 その手があつたか婿養子だ。  
誰が婿に來たいのよ、こんな店。

勝一 馬鹿、バブルが弾けたなんて気が早いなよ。持ち直すに決まっている。森真一と森昌子みたいに、盛大に式をあげるといいさ。

智恵 式は、挙げられないの。

園子 どうして？

智恵 結婚…、もうしてるから。

勝一 ★いつの間に!?

園子 ★ええ!?

寿美 ★ほんとに!?

智恵 違う違う。最後まで話を聴いて。

園子 どういうこと？

智恵 向こうは、結婚してるの。

勝一 ……は？

寿美 ……不倫、ってこと？

智恵 ……(頷く)。

勝一 お前、ちょっと待て、冗談だろ？冗談だよな？

智恵 そんなに取り乱さないでよ。ああ、もう、言わなきゃよかった。やんなっちゃう。

園子 (ひどく取り乱して)考え直さない、ちーちゃん!

勝一 ☆ママ？

智恵 ☆待って、落ち着いてってば。今離婚に向けて準備してくれているところで、もう少ししたら、

園子 馬鹿言ってるじゃないわよ!5年も前から付き合っていて離婚しないそんな男、一生、いえ、来世まで離婚なんてしません!

智恵 なんてそんなに頭ごなしに★否定するのよ…。

園子 ★頭ごなしに否定するわよ。ねえちーちゃん、落ち着いて。あなたもう31よ?もう失敗できない歳なのよ?こんな可愛い娘をたぶらかして、最低の男だわ。

智恵 いるいるな事情があるの!ママだって金妻…、金妻ハマってたじゃない!

園子 ドラマと現実とは別でしょ?!大体あなた中島みゆきなんか聞いているからそんなジメジメした恋愛するんでしょう!ユーミン聴きなさいよ!ユーミン!

智恵 ユーミンだってルージユで伝言してるじゃない!?

春彦 お茶が、

園子 なんです?

春彦 お茶が、冷めますよ。

園子 …ああ。

無言で園子、お茶を皆に出す。全員、疲弊している。

勝一 …こんなの、あと何年繰り返すんだ。

皆、お茶を啜る。

寿美 ねえ智恵、そのお相手は…、

園子 もうやだこれ以上聴きたくない、

寿美 お子さんはいらっしやるの…？

智恵 うん。…4人。

勝一 ☆4人!?

寿美 ☆4人!?

園子 ☆ああ…。

寿美 それじゃやっぱり…、離婚は無理じゃない。

智恵 でも子供にも奥さんにも愛想尽かされてるって。

勝一 そんな奴のどこに惚れたんだよ…？(園子に)どうした？

園子、立ち上がっていて、廊下の方へと歩く。

園子 (2階に向かって)健太。…健太!…お茶淹れたから、ぜんざい食べ

ない?ぜんざい。お雑煮でも…。

返答はない。そのまま園子は、暫しの間立ち尽くす。

勝一 …家族の氷河期だな。

全員、勝一を無視する。

勝一 …んだよ。

勝一、スーパーファミコンが目に入り、スイッチをつける。

勝一 (百々しく)なにになに…?スーパーマリオワールド?

智恵 …ねえ。

勝一 なに。

智恵 それ、健太の。

勝一 俺が買ってやったんだ、みんなの…、(寿美を見て)みんなのスーパーファミコンだろ…。

智恵 何それ。

勝一 なんかも最近車のゲームが流行ってんだろ？マリオの、なんだ？あれやるのかな、俺。

智恵 人とやんなきゃ楽しくないわよ。

勝一 人と…？

智恵 みんなでできるゲームなのよ、マリカーは。

勝一 みんなで…。

勝一、一度立ち上がり、廊下の方へ行き、2階の方を見るが、思い直して再び座り込み、ゲームを始める。

寿美 …もう駄目。私耐えられない…。

勝一 なんてお前が取り乱すんだよ…。

寿美 …(懇願して)何かいいお話を聴かせてくださいませんか？

春彦 (呆気に取られて)俺が…？

寿美 神職さんでしょうか？

春彦 都合のいい時だけ担ぎ上げて…、俺離婚してるんだよ？

寿美 もう10年以上も前の話でしょ？

智恵 教えて。どうすれば離婚に追い込むことができるの？

春彦 怖い話をするなよ。

智恵 (ため息をつく)

春彦 …じゃあ、いい話ではないけど、

寿美 何？

勝一、ゲームオーバーになったらしく、コントローラーを投げ出す。

勝一 つまんね(と言って、大の字に横たわる)。

寿美 続けて。

春彦 …あまり面白い話ではありませんが…、僕は昔、運動なんかからきし駄目で、積み木やお絵描きが好きな、子どもでした。

勝一 インドアってヤツか。

春彦 ええ。養護施設にいた頃の話です。

智恵 え、養護施設？

寿美 春彦さん？

春彦 智恵ちゃんには知らなかったな。俺は戦災孤児でね、お義父さんから養子に取ってもらったんだ。

勝一 うすうす勘付いてはいたけどなあ。

春彦 すいません。なんだかずっと、言えなくて。

寿美 そりゃまあ、そうよ。

春彦 そうは言っても僕は運のいい方で、最初に引き取ってくれた親族も良くしてくれたみたいなんです、

智恵 みたいて？

春彦 物心つく前にすぐ死んだから。

智恵 超激動なんですけど。

春彦 それで、その親族は自分が死ぬ前に僕を施設に預けてくれたから、浮浪児にもならず済んで。

智恵 フロウジ？

寿美 あんた30過ぎて何にも知らないのね。恥ずかしくないの？

智恵 女磨ぎは時間がかかるの。

寿美 それで不倫してちゃ世話ないわよ。

智恵 もう不倫じゃ、ありません。

勝一 お前ら。話が逸れてるだろ。それで、克也さんとはどうやって出会ったんですか？

寿美 ★なんで敬語なの？

智恵 ★なんだか、「いつみても波乱万丈」みたいね。

春彦 その…、出会ったのは、僕が小学6年生の時。夕方学校から帰ってきて野球ボールで遊んでいたところに、背広を着たお義父さんが訪ねてきました。

寿美 その頃から野球好きだったのね。

春彦 彼は、僕に会うなり「坊主、野球は好きか？」と訊いてきました。

春彦、そこにいる一回に話しながらも、その場にはいない、目には見えない誰かに向かって、その当時のことを鮮明に思い出そうと努めながら、言葉が続ける。

春彦 僕はそう訊かれて、多分、少しだけ間が空いたと思うんですけど、

勝一 「はい、好きです」そう、答えました。

勝一 運命だなあ。

春彦 (マイクを取りに行きでもそれは…、(マイクで)嘘でした。

寿美

春彦

え？

養子を取りたい方は当たり前ですが、元気な子供を欲して、養護施設を訪問します。子供もそのことに気づくので、遅かれ早かれ元気を訴えかけるようになります。でも僕は、それがずっと、できなくて、物心ついた時からずっと、部屋の隅っこで積み木やお絵描きばかりしていました。今思うとその時間は、とても、長かったように思います。そうしている内にいつの間にか、同じ頃に施設に入っただ子たちはおるか、後から入ってきた子たちも、とくに引き取り手が見つかっていって。残っているのは、何がしかの、その、障害のある子たちや、素行に問題のある子たちばかりで、自分が一番体がデカくて、いや、大きくて、こりやまずいぞなんて思って、次に養親の方が来たときは、精一杯訴えかけようなんて思うようになって、庭でボール遊びをするようになったんです。でも別に僕は、野球が、好きではなかった。嫌いでもなかった。ただ、もう独りは嫌だった。だから…、その時聴こえてきたんです。下駄箱の方から。いつもキャッチボールして遊んでいる、低学年の、元気な子どもたちの声。だから僕は、焦って、気が気じゃなくなって、「坊主、野球は好きか？」と問われて、一瞬だけ考えて、「はい、好きです」と、嘘を、ついたんです…。戦後50年。戦災孤児とは云っても、恥ずかしながら僕は、戦争そのものについての記憶はありません。いまだに苦しんでいる方、僕よりも悲惨な目にあっただ方、それこそ星のようにいる中で、僕の話なんて本当にちっほけで、心底つまらない話ですが、僕の中には、あの時ついたちいさな嘘が、瘡蓋(かさぶた)のように残っていて、忘れたかと思えば思い出し、思い出したかと思えば忘れる、というようなことを繰り返しています。あの時僕の代わりに、養親に引き取られたかもしれないキャッチボールの好きだった彼が、彼らが、今どこかで幸せに暮らしていることを、心より祈念申し上げます(と、深々と一礼する)。

(空気を变えるように)「いやあ…まさか春彦くんがテレビに出るとはなあ！

それこの1年で何回言うの？

聞き飽きた。

やっぱりサインをもらっておいてよかったよ。

ミーハーなんだから。

春彦さん。ありがとうね。

？はい。

勝一

寿美

智恵

勝一

寿美

園子

春彦

園子 私、難しいことはわからないけど、健太にね、「春彦さんがテレビに出てるわよ」って言ったらね、あの子血相変えて部屋から出てきてね、私たちほとんど久しぶりに一緒にテレビを見たんですよ。それは、よかった。

園子 その後なんか、俺も部屋にテレビ買うなんて言って、今度アルバイトの面接を受けるって張り切ってるのよ。

勝一 アルバイトなんて、誰にでもできる仕事だろ。

春彦 黙ってなさいよ。

園子 いえむしろ、僕の方がお礼を言いたいくらいです。

春彦 どうして？

園子 この家で話さなかったら、ああいう話をテレビでしようと思わなかったから。

勝一 そうかそうか。

智恵 ねえ、春彦さんは野球のこと、後悔してるの？

春彦 え？

智恵 だって、そういう風にも取れる話でしょ？

勝一 馬鹿だなお前。あれは運命の話だろ？

春彦 後悔は、してないよ。

勝一 ほら。

春彦 ただ…、

園子 ただ？

春彦 いやただ…、野球をやってなかったら、自分は何をしていたのかとは思いますが。

智恵 どういうこと？

春彦 野球も、神社も、結婚も離婚だって、結局俺は人に流されているだけだったから…、別に恨んじやないけど、親に「野球は好きか？」って言われなかったら、きっと野球をやってないですよ。

園子 ☆(顔が蒼白になっていき)…。

勝一 ☆たればを言い出しても仕方ないだろう。

春彦 まあ。

智恵 ママ？

園子 春彦さん、それって、

春彦 はい？

園子 私が悪いってことなのかしら…？

勝一 どうしてそうなるんだよ？

春彦 何が？

園子、ゆっくりと立ち上がり、「死」の出口の方へ進みながら、

園子 私が「勉強が好きなのね」なんて言ったから、健太は勉強してたの？

春彦 ★園子さん、それは、

勝一 ★(戦慄して)おいお前、座れよ。

園子 私が「恋愛は自由よ」なんて言ったから、智恵は不倫に苦しんだの…？

智恵 ママ、しっかりして。

園子 「幸せ」なんて言わなければ、幸せに苦しめられることもなかったの…？

寿美 やめて…やめてよ…。

勝一 おい待て園子！待ってくれよ！

園子 私の人生、間違っていたのかしら。

勝一 違う！間違ってたんかいなさい！

園子 (出口の極めて近くで)ねえ、あなたの書いた小説、今度読ませてね。きつといい小説が書けるわ。

勝一 書けなくていい！書けなくなっちゃっていいって！間違ってたのは俺だ、な？お前がいたから店が続いて、繁盛したんだ。自分で自分を褒めてやれよ。誰がなんと言おうと、俺は…、

園子 …そう。

園子、スタスタと自座に戻りながら、

園子 自分で言ったこと、忘れないでくださいね。

勝一 わかってるよ。

寿美 もう、どうなることかと思ったわよ。

園子 ごめんなさいね。

智恵 よかったパパが暇で、見つかるのがもう少し遅かったら危なかったって里見先生言ってたんだから。

春彦 まさにメーカードラマですね。

園子 なんでも野球に喩えないでください。

春彦 あ、ごめん。

と、智恵の携帯電話が鳴る。

勝一 ん？誰か鳴ってるぞ。

智恵 (携帯電話を取って)もしも

し。うん…私。…あ、  
うん、おめでとー。う  
ん…。よろしく。え、聴こ  
えない…。待って、待っ  
て、本当に！？☆

智恵 パパ。

智恵 代わってって。

勝一 は？俺？(電話を代わって)

はいもしもし、智恵の父で  
すが？…あ、先生。昨年は  
妻が本当にお世話になりま  
した…。本当に先生のおか  
げで…。え、はい。…は  
い。…はあ！？  
☆そうですか…いえ突然の  
ことで…あ、いえ、はい。  
それでは、はい。…お待ち  
しています。…では、ま  
た。今年もよろしくお願  
いします…。

(電話を切り、智恵に返す)

寿美 どういうこと？

勝一 ご挨拶に、来るって。

園子 ご挨拶って…、

智恵 …うん。

寿美 ★え？え？

勝一 ★お前ら、付き合ってたのか！  
園子 いつの間に？

勝一 またアイツか？

園子 別れたって聞きましたけ  
ど…。

勝一 ☆何言われたんだ？おい今  
度は何言われたんだ？  
園子 また嫌われるわよ。

勝一 ごめんなさい。

園子 え、誰？

智恵 しつ。

寿美 何？

春彦 先生？

園子 え、まさか里見先生？

智恵 ★うん。

春彦 ★どなたですか？

園子 ☆え、何？

智恵 ウケる。

寿美 何なの？

春彦 お待ちしてますって。

園子 何をかしら。

智恵 ママが退院して、すぐ。

園子 ☆まあ！

寿美 ☆何あんた、医者と付き合ってるの？

智恵 (ギャルピースで) イエイ。

寿美 ★何それ。

春彦 ★凄い話ですね。

勝一 あんな若造引つ掛けて。10個も年が違うんだぜ？

寿美 ☆10個!?(と春彦を見る)

春彦 ☆10個!?(と寿美を見る)

園子 とつても男前なのよ、私が結婚したいくらい。

勝一 ★ちよ、ママ、どっついうことだ？

智恵 ★ママ。

園子 (立ち上がり、安室奈美恵で) キャンユセレブレ〜キャンユキスミ〜

トウナ〜ア〜イ♪

智恵 気が早いから。

園子 ふふ。これでもう安心。(何となく「死」の出口の方に歩いて行き

ながら) 健太もバイト続いているみたいだし、いつお迎えがきてもいいわ。

勝一 (立ち上がって) 馬鹿なこと言つなよ。

智恵 ほんと。花嫁姿も見てもらわないと。

園子 (立ち止まって) そうね。孫の顔を見るまで死ねないわね。

智恵 気が早すぎるってば。

寿美 あとはどっかの誰かさんが、

勝一 はいはい、分かっていますよ。

春彦 まだ健太と仲直りしてないんですか？

勝一 時間が合わないだけさ。アイツは深夜に働いているから。

園子 (自座に戻って) 早くしないと世界が減んじゃうわよ。

勝一 誰が信じるんだよそんなの。

園子 健太は信じてるみたいよ？

勝一 全くあいつは、ゲームのやりすぎだろ。

園子 素直でいい子なのよ。

勝一 よおし、(「死」の出口へとゆっくり歩き出して) 今年こそ、リベンジだ。まずは健太に頭下げて、智恵と一緒にバージンロードを歩いて、それからママと、江の島で…、

園子 まあた言ってるの？

勝一 まだ遅くない…、まだ遅くない…、

園子 あなた、ねえもう許してあげ…、

園子が振り返ると、勝一はもう「死」の出口へと退場していた。寂しい沈黙。の後、廊下から健太の声がある。

健太(声) ただいまー。

健太、廊下から久しぶりに登場。

健太 ただいま。

園子 おかえり。

寿美 ☆おかえりなさい。

春彦 ☆おかえり。

健太 ☆母さん、飯残ってる？

園子 食べるなら電話ちょうだいよ。

健太 あるでしょ？

園子 じゃ、お節の残りを出すわね(と言って、廊下へ退場)。

健太 (廊下の方に)あ、蕎麦も食べたい。

智恵 ずいぶんフツーに登場するじゃない？

健太 は？何が？

寿美 ノストラダムスにビビってたんでしょ。

健太 冗談でしょ、あんなの。姉ちゃん、ジャンプした？

智恵 何それ、は？ジャンプ？

健太 うわ。すっかりおぼさんだな。2000年になる瞬間ジャンプするのが若者の中でブームだったの。

寿美 アンタももう30過ぎでしょうが。

春彦 大晦日まで働いて。無理してないか。

健太 春彦さんに言われたくないよ。

春彦 あ、そっか。

健太 までも今は、うん。

智恵 働くのは結構だけど、ママのこと労いなさいよ。アゴで使わないの。

園子、赤子を抱いて「生」の入口から登場。

園子

ほーらちーちゃん。ひーちゃんが泣いてるわ。

智恵 ★え、また？

健太 ★自分だって使ってるじゃん。

智恵 (赤子を受け取りながら)子育てと一緒にしないでよ。なに？ひかるちゃん、どしたの？さっきおっぱい飲んだでしょお？

園子 (赤子の尻に顔を近づけ)うんちよちーちゃん。うんち。

智恵 え、うそ、うんち？

みな、無駄に「うんち」だの「おっぱい」だの言い、場を賑やかす。

智恵、赤子を座布団に寝かせ、オムツを取り外す。

園子 やっぱりうんちだわ。

智恵 (オムツを取り替えながら)たくさん出してエライねえ。

春彦 うんちを出して褒められるのは、赤子の特権ですね。

健太 特権っておかしいよ。

智恵 あ、やだ、あんまり動かないですよ。

園子 足を押さえるのよ、足を。

寿美 何だか久しぶりに賑やかね。

園子 そうね、去年は一年…、

寿美 …ママ、泣いてるの？

園子 馬鹿ね、だいでだんがないわ(泣いてなんかいないわ)…。

寿美 …なんでなのかしらね。長く生きてても「死」に慣れないのは。

健太 でもほら、死んだらみんなが労ってくれるから。

寿美 え？

健太 おばさん知らない？父さんが昔、教えてくれたんだよ。死ぬのが怖くて仕方なかった時に。こう、死ぬでしょ？するとね、

寿美 馬鹿ね、知ってるわよ…。

園子 ほーら、ひーちゃん風邪引いちゃうわ。

智恵 うん。(赤子を抱きかかえて)ひかるちゃん、みんないっしょで楽しかったでしゅね。(立ち上がり)ほんと子どもって、宝物ね。

智恵、廊下へ退場。

健太 あれ？飯は？

園子 あらやだ。すっかり忘れてた。

健太 もう。

園子 ちょっと待ってなさい。

健太　　いいよ、俺も行くよ。  
園子　　じゃあ手伝って。  
健太　　俺甘酒も飲みたい。  
園子　　節操がないのね。  
健太　　残りものには福があんの。  
園子　　はいはい。

園子、健太、廊下へ退場。

寿美　　ヨソ者だけになっちゃったわね(と、みかんを剥き、食べ始める)。  
春彦　　実家でしょう、寿美さんは(続いてみかんを剥き、食べ始める)。  
寿美　　いいえヨソ者よ、私は。ヨソ者になりたかったの。  
春彦　　いるんなことがありましたもんね。  
寿美　　ほんとよ。テレビ出たのは？何年前？  
春彦　　平成7年だから、6年前。  
寿美　　まだ6年？私の定年より後だったっけ？  
春彦　　定年後も忙しくしてたから。  
寿美　　ああボランティアね。  
春彦　　立派な人生ですよ。  
寿美　　違うのよ。違うの。  
春彦　　なにがです？  
寿美　　ここにいると思いい出た、殺されてしまうから。  
春彦　　。。  
寿美　　：ねえ、恥ずかしいことを聞くけど、  
春彦　　んん？  
寿美　　木村になるうと思わなかったの？  
春彦　　え？…ああ。  
寿美　　もう、忘れちゃった？  
春彦　　忘れました。  
寿美　　嘘つき。女たらし。  
春彦　　たらしでないし。酷い。  
寿美　　ジュークボックス誘っておいてその逃げ方はないじゃないの。  
春彦　　：考えたよ。もちろん。  
寿美　　嘘。  
春彦　　嘘じゃないよ。

寿美 じゃあ、  
春彦 トンネルが、こわかったんだ。  
寿美 トンネル？  
春彦 野球のトンネルだよ。(重そうな体で実践しながら)野球では、こ  
う、投げて、相手が、取れそうなゴロを打った時に、そのボールを  
取り逃しちゃうことがあるんだ(と、股の間から寿美を見る)。  
寿美 …ん？  
春彦 昔から、大事な球ほどイレギュラーに跳ねて、取り逃しちゃうか  
ら。野球も、神社も。だから…、

寿美、一間で眠りについていた。

春彦 …寿美さん。  
寿美 (目覚めて)トンネルよね。聞いてるわ。  
春彦 寝てたじゃないか、今。  
寿美 でもあれでしょ？ボール投げなきゃ始まんないでしょ？野球は。  
春彦 …そうかもな。  
寿美 …近々韓国行こうと思うのね、私。  
春彦 急に？え、韓国？どうして？  
寿美 ヨン様に、会いたくて。  
春彦 会えないだろ、韓国行ってもヨン様には。  
寿美 その、セカンドライフって言うの？ちょっと離れた場所で、暮ら  
してみたいのよ。このまま多摩にいても、思い出た、  
春彦 殺されるから？  
寿美 あらやだ、よく分かるわね。結婚する？  
春彦 情緒が、酷いな。  
寿美 それに私、この家がなくなりでもしたら、灰になっちゃう。  
春彦 なくなりやしないだろ。  
寿美 分からないでしょ、  
春彦 …でも、一人でいくのは寂しくないか。  
寿美 そうね。でも私は(立ち上がって)、  
春彦 うん。  
寿美 人と居ても寂しいから。  
春彦 …。

園子、廊下から登場。

園子 あら。もう帰っちゃうんですか？  
寿美 そ。寝る前に録画したK-1観るの。  
園子 甘酒、飲んでからにしたら？  
寿美 駄目。飲んだらまた帰れなくなっちゃう。  
春彦 飲まなくなつて、毎年昼までいるじゃないか。  
園子 毎年5回は帰りかけますからね。  
寿美 なに、私のこと、そんな風に思ってたの？  
園子 (笑って)ええ。  
寿美 もう。  
春彦 甘酒でも酔っ払ってしまうのは、やっぱりふくさんの血なのかな。  
園子 そうだったわね。  
寿美 お母さん、終いにや、踊りながら寝始めてたんだから。  
園子 (愉快に笑って)  
春彦 踊りながら？  
園子 昔私がお嫁に来た時はね、レコードをかけて、大晦日にみんなで踊っていたものよ。  
春彦 愉快的な家族だなあ。  
寿美 あ、ねえ、もう70年くらい経つのかしら、大正の頃はこの家酒屋だったでしょう？  
園子 ええ、話には。  
寿美 だけどね、お母さんはお酒が弱かったもんだから、お父さんは純喫茶に鞍替えしたっていう話なのよ。  
園子 純愛だわ。  
寿美 純愛なのよ。  
春彦 知らなかったな。  
寿美 まさかお父さんも、店がカラオケになるとは夢にも思わなかったでしょうけどね。  
園子 ええ。

眼鏡をかけた健太、廊下から登場。甘酒をお盆に乗せて持ってきた。

健太 やあやあ、お待たせしました。

元からいた3人、思い出と健太の姿が重なって、一瞬言葉を失う。

健太 え、なに。  
園子 ううん…、甘酒できたのね。  
健太 うん。  
園子 ありがとう。  
健太 突っ立ってないで座りなよ。3人ともお年寄りなんだから。  
園子 ☆はいはい。  
春彦 ☆俺もか？  
健太 うん。

園子と春彦、炬燵に向かって座るが、寿美は立ったままで、

寿美 じゃ、今度こそ、お暇するわね。  
園子 ええ。  
健太 じゃあね。  
寿美 健太、アンタヒーちゃんにお年玉あげなさいね。  
健太 わかってるよ。  
園子 今年もよろしくお願いします。  
寿美 よろしくね。あ、春彦さん、  
春彦 ん？  
寿美 (正座して)宮司さん就任、おめでとう。  
春彦 ありがとう。  
園子 またすぐ来てくださいね。  
寿美 (ゆっくり立ち上がって)ええ。  
健太 またね。  
寿美 またね。

寿美、玄関へと退場。

健太 (園子に)ちやぶ台もういい？  
園子 え…、うん。

健太がちやぶ台を片付ける姿を、園子は寂しそうに目で追う。  
智恵、お節料理を持った大皿を持って廊下から登場。

智恵 盛りすぎちゃった。  
健太 俺そんな食べないよ。

春彦　じゃあ俺、つまもつかないかな。  
智恵　助かります。  
健太　え、あれ、蕎麦は？  
智恵　あ、ごめん、  
健太　伸びちゃうよ。  
智恵　自分でやりなさいよ。

智恵、また廊下へと退場。

健太　大丈夫かな。

★ん？

春彦　★姉さん。

園子　なにが。

健太　向こうの実家と上手くいつてないんだろ。

園子　智恵が言ったの？

健太　ひかるがさ、

園子　ひーちゃん？

健太　年未来た時、ずっとこの家いたって泣いててさ、

園子　人それぞれ。家それぞれ。

春彦　里見先生の地元はどこだっけか。

園子　岩手よ。

健太　ホタテが美味しいところ。

春彦　そりゃまた遠いなあ。

園子　地元一の開業医なのよ。

春彦　へえ。(甘酒を一口飲んで)…なあ、

健太　え？

春彦　なんだか飲みやすすくないか。

健太　牛乳が入ってるんだよ。

春彦　甘酒に？

園子　今度お店を出してみようかしら。

健太　いいだろ、そんな。

智恵、健太の蕎麦を持って廊下から戻ってきて、

智恵　はい、お蕎麦。

健太　お、きたきた。(と、スマホを取り出して)

智恵 わ、でた。スマホ？

園子 ★スマホ？

春彦 ★スマホ？

健太 (スマホを構えて)うん。

智恵 そんなデカい携帯流行るわけないわ。

健太 (写真を撮って)いただきます。

春彦 高いんだろ、それ。

健太 まあ。

智恵 そんなお金あるなら、ママに家賃入れなさいよね。

園子 いいのよそんな、居たいだけ居て。私たちの家はここにしか、

健太 あのさ、

園子 (何かを予期して)やめて。

健太 俺…、家を出ようと思うんだよ。

園子 …(卒倒しそうになって)いっ、

智恵 ママ？

園子 今…!?

春彦 結婚するのか？そつだろ？

健太 まあその、同棲だよ。

智恵 同棲!？アンタ自分の歳分かってんの？

健太 不倫女に言われたくないよ。

智恵 はあ？いつの話を持ち出して☆んのよ。

園子 ☆もういい、やめて。これ以上喧嘩しないでよ。

健太 …(立ち上がって)、

智恵 すぐ逃げる。

園子 健太…、

健太 七味取ってくる。

健太、一度立ち止まるも、玄関へ退場。

智恵 ママ、私はそばにいるね。

園子 いいのよ、もう期待しないの。

智恵 大丈夫だってば。里見くんもまだ岩手には戻らないし、ひかるだっ

てママが好きだし。

園子 嬉しいわ。

智恵 コーヒーでも飲む？

園子 うんとまづいのを淹れて。

智恵 苦いのってこと？分かった。

智恵、玄閑へ退場。

園子 (鋭く廊下の方を向き、)ちーちゃん。…やっぱり大丈夫。戻ってきて。そっちは危ないわ！…(立ち上がり)ちーちゃん！

園子、立ち尽くしたのち、神棚の方へと早歩きで向かい、二礼二拍手。長い一礼をした。

園子 …(振り返って)あらやだ…、まだいたんですか？

春彦 え？

園子 …冗談よ。

春彦 あ、冗談。

園子 (自座に戻って)ごめんなさいね。勝一さんが…、うん？

園子 いえね、よく言ったでしょう勝一さんが、つまらない冗談。

春彦 言ってた言ってた、うん。

園子 憎たらしくてしょうがない時もあったけど、あるのね。冗談しか言えない時が。

春彦 今年は俺、柄にもなくお笑いとか観ちゃったよ。

園子 わかる。私あの人たち好き、あの、ピンクの…、

春彦 はいはい、あれだろ、じゃんじゃかじゃん、じゃん…、

二人、誰のことを言いたいのか全く思い出せない。

春彦 …今年は何白誰が出てたんだい？

園子 あ、そう！聞いてよ春彦さん！

春彦 何？何？

園子 ユーミンが出てたのよ。

春彦 ユーミンが？

園子 大事件なのよ、ユーミンの紅白は。初出場。

春彦 そんなにかい。

園子 あとでちーちゃんにLINEしなくちゃ。

春彦 で、なに歌ったの？ユーミン。

園子 『春よ、こい』。沁みたわあ。

春彦 いいね。

園子 あ…、(春彦を指して)春。

春彦 うん？

園子 私たちの最初の子どもはね、生まれて間もなく天国に行ってしまったでしょう？

春彦 聞いたことあるよ。

園子 あれは年の瀬の、とても寒い頃だったから、毎日私たち、震えながらね…、春よこい、春よこいって、心の中でたくさんお祈りしていたの。

春彦 ああ。

園子 そしたらね…、(春彦を指して)春が来たのよ。

春彦 あ、俺？

園子 ちょっと違うなあって笑ったわ。失礼でしょ？

春彦 (考え込むように)…。

園子 …これも冗談よ？

春彦 春彦という名はね、

園子 え、うん。

春彦 親父が、つけたんだよ。

園子 親父って、え、克也さん？

春彦 元の名は「五郎」って言って、「春彦」は田崎に入る時に。

園子 そう…。そうなの。

春彦 多分。

園子 ふ、なーんか、ズレてるのよね。克也さんて。

春彦 ごもつとも。

園子 でも春彦さん…、(床に手をついて)ほんとにありがとう。

春彦 いやいや、俺は何も、

園子 私がいなくなってしまうたら、春彦さん使ってくださいね。この家を。

春彦 おい園子さん、なにを言ってる☆んだ？

園子 ☆だってみんな…、いないんだもの…。

春彦 …でも俺は、この家を…、見てるのが好きなんだよ。

園子 …え、見るだけ？

二人、小さく笑う。

春彦 店はまだ、続けるの？

園子 ええ。

春彦 健太は何やってんだ？

園子 なんかわからないんだけどね、リアルならゲーム？

春彦 (微塵も分からず)…。

園子 あらやだ私、コーヒー忘れてた。

春彦 いいよもう、眠れなくなる。

園子 じゃあ甘酒も少し飲まれる？

春彦 牛乳入り。

園子 気に入ってるのね。

春彦 ああ。

園子 でもお店ではあんまりよ。(ぶつぶつ言いながら)何が、何が、足りないのよね…。

園子が廊下へと退場し、春彦は一人になった。

春彦、立ち上がり、家の中を見回し、思い出を巡って探索をする。

最終的には神棚の前まで来て、やがて、「死」の出口に目を向けた。

春彦 …。

春彦、一歩足を踏み出す。

と、外から春彦の孫、清春の音がする。

清春(声) じいちゃん！

田崎清春(以下、清春)、縁側から登場。

清春 じいちゃん。

春彦 …(振り返って)おお。

清春 おおじゃねえよ。寝るぞ、そろそろ。

春彦 (なんだか笑えてきて)まだいいだろう。

清春 俺が親父に怒られるんだよ。

春彦 (笑いが止まらなくなり、)

清春 何がおかしいんだよ。

春彦 放っておけよ。

清春 一番祈祷だけして休む約束だろ。

春彦 園子さんはどうした？

清春 まーた変な甘酒作ってるよ。今年は黒豆入れた。

春彦 変だな。

清春 変だろ。

春彦 じゃ、お暇するか。

清春 うん。

清春、しゃがみ込み、春彦をおんぶする体勢を見せ、

春彦 ん？

清春 危ないから。

春彦 (清春の背中に体を預けて) ったく俺は昔、この辺じゃ、多摩の長嶋なんて言われてたんだぞ？

清春 長嶋？一茂？

春彦 その親父だ。

清春 え、あ、野球の？じいちゃんやってたの？

春彦 ああ、剛腕だったんだぞ。

清春 ピッチャーもやってたの？じゃあ二刀流だ。

春彦 二刀流？

清春 大谷知らないの？

春彦 大谷。

清春 投打両方でベストナインになったんだぜ？

春彦 (豪快に笑って) じゃあ、逆立ちしてお節食べないとな。

清春 意味わかんねえから。

春彦と清春、縁側から退場。

舞台上には誰もいなくなった。

しばらくして、廊下から園子が登場。

誰もいないことに呆然として立ち止まる。

が、やがて園子は、氷川きよし『きよしのズンドコ節』とザ・ドリフターズ『ドリフのズンドコ節』を交ぜて口ずさみながら、炬燵の上の食器を片付けたり、回りを整理したり、し始めた。

と、園子のスマホが鳴る。小気味よく操作して応答し、

園子 もしもし…。ちーちゃん。元気？…元気よ。もっピンッピン。…あ

けましておめでとう。そっちはどう？寒くない？…ホタテありがとうね。美味しかった。…あ、ねえ、今年もユーミン出たのよ、紅白。観た？…何よ、みゆきは相変わらず出ないわね。私の勝ちだわ。…ひーちゃんは元氣？もう大学には慣れた？…え…、あらいいじゃない。私は…、分かった分かった年寄り引込みますよ。…え？…4日からやるわよ。…私今年ね、甘酒に夕ピオカ入れようと思ってたの。…そう、(得意気に)映えるかなって。…でもね、一人だとまあ、長い。…うん、正月がね、長い。…あ、うん、またね。今年もよろしく…。

電話を切った園子、表情を失い、呆然とする。  
と、縁側から寿美が登場。

園子 寿美さん？

が、寿美、返答せぬまま「死」の出口に退場して行った。  
時を同じくして、不織布マスクをつける園子。  
少しの沈黙。

の後、何かを思い出して立ち上がり、神棚の方へ歩いた園子は、背伸びをして、神棚のあたりからノートを手を取った。

埃を手で払いながら縁側へ向かった園子、腰を掛けてノートをパラパラとめくり始める。

と、智恵の娘・ひかるの音がする。

ひかる(声) おばあちゃん！…おばあちゃん！

園子 そんなに大声を出さなくても聞こえているわよ。

「生」の入口から、里見ひかる(以下、ひかる)、登場。

ひかる もうマスクよくない？

園子 ああ(と言って、マスクを外す)。

ひかる 何読んでんの？

園子 これはね、あなたのおじいちゃんの、小説？

ひかる え、すごい。おもしろい？

園子 それがね、(愉快そうに)全っ然おもしろくないのよ。

ひかる じゃ何がそんなにおかしいの。

園子 ふふ。内緒。

ひかる なんだかうれしそう。

園子 嬉しいわ。一緒に暮らせるんでしょ？

ひかる 配属が東京になればね。

園子 なるんでしょ？

ひかる 多分ね。

園子 加筆しちゃうかしら。

ひかる 加筆？

園子 無限孫同居編。

ひかる おばあちゃん、若すぎ。

園子 フートを縁側に置き、ゆっくり立ち上がって作者に許しを得ないとね。

園子、「死」の出口に向かって、ゆっくりと歩き始める。

ひかる (フートを開いてわ、THE・昭和って字。

園子 (ボソボソと理想ばかり掲げて地に足がついてないのよね。

ひかる ねえ、おばあちゃん、私東京来たらカラオケ大会しようよ。何歌

う？

園子 ユーミンと、中島みゆき。

ひかる えー？その二人ってライバルじゃないの？

園子、「死」の出口へと退場。

ひかる (振り返って)おばあちゃん？

ひかる、少しの沈黙ののち、やがてノートに目を戻した。  
少しして、縁側から健太、登場。

健太 よ。

ひかる 遅いよ。

健太 ごめん。

ひかる 仕事長引いた？

健太 うん。

ひかる お疲れ様。

健太 一番祈祷行った？

ひかる 行きましたよ、春彦じいちゃんのご祈祷に。

健太 だいぶ何言ってるかわからないだろ。

ひかる それがいんじゃない。

健太 ありがとな。

ひかる え？

健太 この家住んでくれて。

ひかる ママにもパパにも、文句言われたけど。

健太 だるうね。

ひかる でも、お正月はゆっくり過ぎたじゃない。

健太 医者の子どもも大変だ。…それ、親父のか。

ひかる 読んだことある？

健太 途中で挫折した。

ひかる なんで？途中からがおもしろいの。

健太 そうなの？

ひかる 鬱々としてたのに、なんか途中から馬鹿みたいに明るくなるの

(と、ノートを差し出す)。

健太 へえ(と、受け取り、縁側に腰を掛ける)。

ひかる ねえ…、昔引きこもりだったの？

健太 そんなことまで書いてあるのか。

二人、笑う。

ひかる おじさん来たなら、お節出そうかな。

健太 食べてないの？

ひかる 人がいないと出す気になれないから。

健太 楽しみだ。

ひかる、廊下の方へと歩いていくが、

健太 あ、なあ、ひかる。

ひかる ?なに。

健太 あけまして、おめでとう。

中島みゆきの代表曲、『時代』のカラオケ音源が流れ、ミラーボールが回り始める。

ひかる、マイクを持って歌い始める。  
そして、木村家とそれにまつわる人々が、代わる代わる『時代』を歌う間、百年間の大晦日と元旦に起こった出来事が、現前する。  
そして時には実際に起きなかった願いや後悔も現前する。  
博、「生」の入口から登場。  
ふく、トミ、玄関から登場。  
克也、縁側から登場。

博 あけまして、おめでとう。

ふく お母さん！お母さん！

トミ そんなに大きい声を出さなくても聴こえているわよ。

克也 やあみんな、俺がきたぞ。

トミ どれ、私がお勝手に行つてきますからね。

博 母さん、どこへ行くんだよ。

トミ、「死」の出口へと退場。

博 俺の葬式はかっちゃんに頼んだよ。

克也 俺より先に死ぬ気か？

ふく あらあらあらあら！起きたの？起こしちゃった？

克也 男とすると、ゆくゆくは戦地で、

ふく あらあらあら！真夜中だつて言うのにもう！

克也 素晴らしい年の瀬だな。ええ？

博 やあやあ、お待たせしました。

克也 やつと俺にもお迎えが来たか。

博 珈琲飲んであたたまりなよ。

克也 何も戦争の話をするために喫茶店を始めたわけじゃないだろう。

博 じゃあ何の話をすればいいって言っただよ。

ふく この1年の話をすればいいじゃない。

勝一、「生」の入口から登場。

勝一 俺明日行くね、初詣。

ふく 何かお願いごとがあるの？

博 そりゃあ、日本国の大勝利に☆決まってるだろう。

勝一 ☆お父さんの目が…、よくなるようになって。

博　　それどこそ日本男児だ。

寿美、「生」の入口から登場。

寿美　お母ちゃん、

ふく　寿美ちゃん、

勝一　寿美、これ、俺の芋、

寿美　みんなのお芋、

博　　明日の初詣のあとはひさしぶりに、高尾の方にハイキングでも行こうか。

ふく　ええ、でも今は…、

博　　じゃあ、戦争が終わったら。

博、「死」の出口へと退場。

勝一　やあやあ、お待たせしました。

ふく　まづいわ。

克也　まづいコーヒーを飲むと、旨いコーヒーのことを思い出せるものだよ。

ふく　さ、踊りましょうか。

寿美　どうしてお母さんは踊るの？私それが、わからないの。

園子、玄関から登場。

園子　なんで…！なんでこんな酷いことが起きるの！

勝一　年が明けたら、旅行に行こうか。

園子　春が来てくれると、いいんですけど。

克也　養子を取ることにしたんだ。

木村家　養子！？

春彦、縁側から登場。

春彦　お晩です。

ふく　あら春彦さん、

園子　今度こそ元気に育ててあげるからね、

勝一　頼むぞ、お前。

寿美　でもいいの？本当に？長嶋になるんじゃないの？

春彦　そんな選手が出てきたら逆立ちでお節食ってあげるよ。

勝一　もう駄目だ、俺は…。

園子　だってあなたは…、幸せじゃない。

ふく　はいはい、すぎ焼きが上がりましたよ。

木村家　すぎ焼き！？

克也　なあ、春彦。

春彦　はい？

克也　巨人は今年も勝つかな。

春彦　勝ちますよ、きっと。

克也　負けたらいいな。

春彦　どうして？

克也　お前のいない、巨人軍なんて…。

克也、「死」の出口へと退場。

春彦　寿美さん、ジュークボックスいつしよに行きますか？

寿美　え、私？私おばさんよ？

園子　ねえ。そのマイク付きのジュークボックス、うちでも買いましょうよ。

寿美　お母さん、

ふく　今年も一年、お疲れ様。

ふく、「死」の出口へと退場。

智恵、健太、「生」の入口から登場。

ここから先は紛れもなく、実際にはなかった出来事である。木村家の、あの時こうであったら、という後悔なのかもしれないし、勝一が書いた小説なのかもしれない。

勝一　健太、何やってんだ。

健太　何って、マリオカート。

勝一　俺も交ぜろよ。

健太　また痛い目合いたいなの？

智恵　私はピーチ、

園子　じゃ私キノピオ。

健太　勝ちにきてるじゃん。

智恵　ほら、やる。  
勝一　来年もこうして★家族で、  
健太　★(マリオカートの)ヒアウィゴー！  
勝一　あ、馬鹿聞けよ。

マリオカートに熱中する4人。声に出してゲームを楽しむ。

春彦　見ているだけでも楽しいですね。  
寿美　大の大人が何やってんだか。  
園子　え、パパ上手い。  
勝一　っしゃ！  
園子　実際の運転よりも。  
勝一　ヒアウィゴーゴーゴーツ！！！！

勝一から他の面々が離れ、それぞれが後悔を抱えながらも実際に起こった出来事に戻る。

園子　ねえ健太、ぜんざい食べないの？ぜんざい。  
智恵　ねえ、ママ、パパ、あのね、  
勝一　そうやってお前は受験に失敗したんだろ。  
健太　こんな店の後継ぎなら生まれてくるんじゃないか。  
寿美　恥ずかしくないの？元号も変わって時代が変わるって時に、  
智恵　ユーミンだってルージユで伝言してるじゃない！？  
健太　でもほら、死んだらみんなが労ってくれるから。  
勝一　まだ遅くない…、まだ遅くない…、  
寿美　私は人としても、寂しいから。  
園子　私の人生、間違っていたのかしら。  
智恵　ママ、私はそばにいるね。  
健太　俺、家を出ようと思うんだよ。  
園子　それがね、全っ然おもしろくないのよ。  
春彦　でも俺は、この家を、見ているのが好きなんだよ。

勝一、寿美、園子、「死」の出口へと退場。  
智恵、健太、春彦、玄関へと退場。

歌の最後は再び、ひかるがマイクを握っていた。

音楽の終わりと共に、溶暗。

静かな暗闇の中、ふくと博の声がする。

ふく あれ…？

博 ふく。

ふく え、あなた？死んだんじゃないの？

博 いや、どうやらな、生と死というのは表裏一体らしいんだよ。

ふく …はい？

幕。

※作中当時の時代背景を鑑み、台詞の一部に現在では不適切と思われる表現を含んでおります。